

付けてそしてそれを安く値切つて買取つて歸るといふことが普通である。どうかすると宮中にあつた、大きな黄、青、赤の鮮かな什錦手茶碗の十人組の揃つてゐる物などが出てゐることがある。是は或る方法に依て番人などがうまく持出した物で其出所は確かな物である。それが法外廉い値段で市に出て來るのである。物好きの人々は之を買つて來て消毒をして用ひて居るものもある。或は飾物にして居るといふやうな物も見る。

支那の品物は何でもかでも珍らしいと思つてよく出來心から買つて歸るのであるが、近來日本出來の物で支那で賣られて居る品物が可なりある。支那更紗は人の喜ぶ所であるが是も桐生足利方面から支那向の柄を拵へて送る、或は古銅器の類にしても新しい物をこちらから拵へて支那へ送る、それを支那の骨董商などから能く日本の實業家杯が珍らしいと思込んで大金を出して買つて來る。古銅器の中にも時たま之を見出すことがある、要するに支那の買物の中には眉唾ものがある、高い關稅を拂つて買つて歸つて仲間の笑ひを招くことが屢々ある、それ故に或る程度迄自信の付く迄は餘り高價な物に手を出すことは考へものである、唯吾人は品物の金額の多寡に依らず、廉い物でも高いものでも唯支那人自身の趣味嗜好の現はれて居るもの、支那人自身の造り方

又其材料の取扱ひ方が何となく面白く日本人の思ひ付かない意外な物これが面白い。そのやうなものが偶にある、是等は其用途の如何に拘らず土産物としてはひどく日本人から珍重されるのである。例へば瓢箪で拵へた鈴蟲蟋蟀杯を入れて寒中鳴かせる蟲籠の如き丁度その好適例である、是は瓢箪のまだ蔓に成つてゐる青い時分に之に鐵の型を嵌めておく、それに色々な支那式の圖案を此型に刻つておく。さうすると瓢箪の面に飛出した型が出來て、それを或る期間よく成熟する迄置いておいて、之を切り取る。その口には、轆轤細工の紫檀の蓋を付ける。そしてその中に螺旋狀の鼠鏰の線を付けておく、容物に入れられたる蟋蟀や鈴蟲はその鳴く音の餘韻が颯々と涼しく鳴り響くのである、支那の上流の家庭に於ては重もに正月から二月に掛けてその室内の内さへ暖くして置いてやれば季節ならぬ冬天に之を鳴かせることが出來るのである。この慰みは支那あたりにては紳士富豪のたしなみとして居る、是は無論日本ではまだ聞いたことの無い物である。物好きの人々に勧めたいと思ふ。斯ういふ類の品物は上品で安直で宜しい、支那あたりで買つても左程高價な物でない、それ程必要でない品物に莫迦な金を出す必要はない、稍々高價な方の物では絹物刺繡類が最も多く其他一般に織物類が多く土産物としては嗜好に投じて居る。

買物は翡翠その外の寶石類は別として美術品にしても、或は書畫類にしても又は紫檀細工の家具類にしても税關の事を相當に考へなければならぬ、書物類は全然關税は取られないけれども其他の物は多いもので四五割の税を課せられる。買方が廉くない場合には税關のことを考へると左迄廉い土産にはならなくなるといふやうなことは豫め考へて置くべきことである、併し唯だ日本に歸つて來た後に思出して見ると値段の如何に拘らず兎に角支那で見た物は東京で見られないものがあるからそのやうな物は少々高くても又税關の事は少々氣になつても兎も角買取つて持ち歸れば宜うしかつたといふやうに後悔するところが屢々あるのである。殊に清朝時代の文武百官の役人の禮服杯には頗る見事な物がある、而かも今日は殆ど捨て賣り同様になつて居る。是には中々善い物がある、さういふやうな物はよい賣物に打つつかつた時には思切つて獲得しておく方がよい支那旅行に、所謂見物と買物との此二つを十分に爲しとけることは甚だ平凡な言ひ方であるが併し日本へ歸つて來てから思ふときは此二つが最も十人向きに興味のあることであつて、さうして自分自身でも支那をそれによつて思出し、懐かし味の種となるのである。されば此二つは十分満足させるやうな仕度をして出掛けるに越したことはないと思ふ。

六 再 遊 氣 分

是迄既に十數回も出掛た自分の立場からして、今回初めて支那へ行つた團員諸子の心理を考へて見るに吾々と共鳴する所が頗る多いやうに思ふ。詰り一度とにかく支那へ來て見た以上は更に二度でも三度でも度々來て見たいといふ氣分が十分溢れてゐる。出來れば次には南方の方へも行って見たい、來年の計畫の時には豫め必ず知らして呉れろといふことを異口同音にそれぞれ熱望して居られた、吾々は之に付て想ふに日本の人は是迄一般に餘りに外國へ出無情であつた或る程度迄出て見れば何の事はない、雜作はない。今回の行程は奉天ハルビン北京を込めて約七八千哩になるが、是は日本に居つて見れば大變エライ事のやうに考へられる。一寸想像して見ると、定めし不便であらう危険であらう、寒いであらう、暑いであらうといふやうな取越し苦勞ばかりをする、手近な例は玄海灘が危なくないだらうかといふことを先づ考へる、一と度び出て玄海灘の月清く波靜かであつたこと、奉天ハルビンの極めて無事平穩であつたこと、北京城門の甚だ嚴かにして頗る安心な状態であつたこと、或は寢臺車の中が頗るのんびりして居つて、列車ボーイの親切であつたこと、旅宿のボーイの甚だ柔順であつたこと杯を考へる時には旅の空で疲れて苦し

かつたことも、それはすっかり忘れてしまつて、面白かつた事のみが記憶に遺つて来る、それ故に一たび支那に遊んだ者は何とかして再遊を試みたいといふ氣分にならない者はない、唯々今後の旅行は事情が許す許さぬの問題である、一とたび皮切り丈けやつて來ればあとは出る癖が付く仕度も手輕に譯なく出掛けられるといふ氣分になれる。其の氣持ちを贏ち得たといふ事だけでも一回目の此視察團の催しは非常に効果があつたことと思ふ。恐らく人人も懲り／＼して二度と行くまいといふやうな氣持ちになつた者は實際無いだらうと思ふ。殊に朝鮮經由、滿鐵沿線といふものは多大の便宜を與へてもらへる、又汽車中で宿との聯絡案内を付けるといふやうな工合に出來てゐる。

昨今のやうな不景氣な時に滿鐵の沿線で獨り時ならぬ好景況を呈して居たのは宿屋である。その繁激の極に達して居たのには驚いた。天手古舞してゐる爲めその多忙の爲めに客に不満足を與へたといふことはあつたけれども兎も角此好景氣を見て近來如何に日本内地から支那へ各種の團體或は個人的視察旅行が多くなつて來たかといふことを吾人は見て非常に愉快に思つた。大連のホテル杯で話を聞いて見ても本年位滿洲旅行者の多い年はない、宿屋の三助杯も餘りに泊り客

が多いので近來睡眠が不足した。風呂場があまり賑はつて三助の體量一貫五百目も減つたと言つて居つた、吾人は日本の有らゆる地方、又有ゆる階級を問はず殊に教育家の中でも小學校方面の教員校長等には支那の旅行をして貰ひたいものである。

近時日本内地の高山探檢のことが著しく盛んになつて來て日本アルプスの如きは其最高潮に達して來た状態であるが吾人は須らく之れに一步を進めて是等の勇壯なる企てが更に朝鮮に滿洲支那に延び長城のかなたに渡り或は泰山に登つて天下を小とし、或は長江を遡つて湖南湖北より四川に向ふとか或は南方臺灣の新高山、阿里山、或は比律賓香港に向ふといふやうに東洋の天地を殆ど吾々の旅行地帯としてしまふといふ位な氣分になつて貰ひたいのである、さういふ氣分を助長せしめて行く最初の企として吾人は滿洲より北京方面に行く旅行、或は上海方面より這入つて南支那の大陸氣分を味ふやうなことは頗る興味のあることと考へた。

七 宣傳の效果

東洋協會の今回の試みは其人數に於ては必しも多しとしないけれども、假令十人でも二十人でも眞に此大陸の氣分を味ひ大陸に於ける日本の延長状態が目下如何なる状態に居り、如何なる不

満足な状態に居るかといふことを目前に見て来たといふことを、又それに對して少なからぬ感想を深く得られたといふことこれは頗る味ひのあることである。殊に是れが日本内地に限られず、西は下關方面より大阪に京都に名古屋に伊勢に福井に東京に宇都宮に信州にといふやうに各地方に其宣傳の中心が出来たといふことは極めて愉快に考へる所である。殊に是等の人々には東洋協會の會員として更に大に宣傳の効果を擧げてもらへる了解があるといふことに於て大に此視察の目的を一層助長せしむることが出来るのである。昨晚も自分の支那室に來訪して見えた友人の廣東から來て居る林文昭君は痛切に語つて、殆ど涙を流さぬばかりに極論して居つた、その述懐の一つに日本の人々はどうしても支那の立場になつて支那の事を考へて呉れない、二十一ヶ條の問題は固よりのこと吾々に氣持ち能く接觸して交際して呉れる人々は日本に洵に少ない、文人的の交りの人は皆な宜しい、併しながら日本の官民の中には支那を了解して呉れない人が多い。支那の真相を知つて呉れない人が多い。支那に同情して呉れる氣持ちになつてゐない、其の弊日本はそれだけ偉くはないと思ふ、世界列國に對して日本の眞價といふものは大抵分つて居る、それに拘らず支那を理解して呉れず、支那を軽く視てさうして思ふ存分勝手な事をして私の國を窘める

私の國は目下南北頻りに争ひを續け、國は衰へて居ることは事實である。けれども、どうにかして眞に我國を了解し、我國の實際の状態に同情して呉れる人の一人でも多く日本から出て呉れる様に世界に對して説得してもらひたい云々といふことを痛切に述べ、最後には二十一ヶ條の問題迄も繰返し々々物語つて居つた。今此の無理解な状態の續く以上は何時迄経つても唇齒輔車同種同文杯と言つて見た所が眞に日本支那が大きな、東洋國としての一つの團塊となつて國力を茲に確立するといふことは到底むづかしい。是非とも一人でも多く支那を見て呉れて同情して呉れる人が日本に殖えて呉れなければ吾々お互ひ東洋人全體の運命に係はることである。日本の人が本當に支那人の友人となり支那人が本當に日本人の友人となつて互に東洋の民族といふ立場になつて進むやうな氣持になつて貰ひたいと頻りと説いて居つたが全く同感である。吾々は平生から林君と懇意にして居る丈けに今回特に感動した譯ではないが、其意味の事は言はれなくても吾々内心に百も承知して居ることである。

八 附 記

尙自分は此の時の視察旅行を了へるに際して團員諸氏の所感を聞いて見たからその大要を左に

附記しておく。曰く、「支那の内地の工藝美術の發達したこと、建築の偉大なのには一驚を感じたが、内地人の滿支方面へ移住して、商店を經營してゐる者の凡てが内地人を相手としての取引で支那人との取引が殆んどない状態であつたには意外であつた支那方面へ移住してゐる以上、僅な内地人を相手の取引で満足してゐるやうでは前途遼遠の感じがする此點は團員諸氏一様に意外としてゐる處で今後は必ず支那人及び外人相手の取引を一層發展して徹底的にその實を揚げらるゝことが肝要である、日本の商品が排斥されるといふ事は事實であるが、之は目下の状態では排斥されるが當然である、例へばタオルの如きものでも支那内地で出来る商品で間に合ふものを、何を苦しんで内地品の高い、そして粗悪な税關のかゝるものを使用することはないのだ日貨排斥は或意味で當然のことであつて、排斥されて不平を並べる方に無理があるのである、それで、徹底的に日本商品を支那に賣り込むには支那内地に於て然るべき工場の設備をした上商品の擴張に努めることが必要である、北京とか奉天とかを視察して内地人の街と支那人の街の商店をみるに、日本人の街は非常に淋れてゐるに反して支那人の街は大いに活況を呈してゐる、この原因も前記の結果が齎らす處が多いが、内地人は少し景氣が好いと字頂天になつて、後日の配慮も何もないと思ひ切つたことをやるが、支那人は景氣の好い時も餘り擴張をしないが、少々不景氣になつて來ても内地人のやうに自動車等を賣り飛ばさなければならぬ様なことではない、朝鮮に入つてからは水利のない點が特に感じられたが、朝鮮にしるゝ支那にしるゝまで大いに内地人の移住し發展する餘地は充分にある。移住する者の爲によりよく滿支朝鮮内地の視察をして呉れと云ふ注文であるが視察の結果は如上の次第で實に意外の處が多い、然し今回の視察は單に北支那の都市のみを主として視察したのであるが、尙南支那及内地の田舎を視察した上で彼の地の事情に通ずることが必要である。」

十三 「支那民俗誌」(永尾氏著)を讀みて

大連、滿蒙文化協會から支那民俗誌(上卷)菊版(三四三頁)が出た。著者は「滿蒙の文化」誌上でその聲譽を揚げてゐられた篤學者永尾龍藏氏である。卷頭に故肅親王の題字や湖南博士の管子八觀篇より録出した題字。故早川社長の贊辭などはなくても其の内容は頗る苦心の存する結晶と見

られる。本書は正月前後の支那風俗を忠實に日本の學界に紹介したもので挿繪三十八葉。よく練れた言文一致で極めて判り易く且つ趣味本位に出来てゐる。印刷も製本も垢抜けがして手に取つて見るも氣持ちのよい手頃の洋綴である。誠に支那文化叢書の第一篇としてふさはしい美本である。

民俗誌の記述は支那國民性を了解せしむるに最も大事なものであるが之を一般の讀み物として出すには中々困難が伴ふもので臺灣に臺灣風俗誌あり朝鮮に朝鮮風俗誌あり又支那の方面にも上海日本堂から出してゐる「支那風俗」(井上氏著)があり何れも一得一失がある。本書の著者とは大連で直接面談の機を得たこともあるが著者がその出来るだけ學術的に現在の民衆風俗を取扱はんとするその努力、又出来る丈民俗の有るがまゝをその通り面白く讀ませようとするその努力が全篇に漲つてゐるのでうれしい。立春の頃の儀式、春牛、裝飾、飲食、占卜等に關する迷心、竈祭りのことから除夜の風習、宮中歳末の様子を述べ又正月のところでは例の桃符、柳の枝の魔力や春聯、門神、蝙蝠、鐘馗、門松、爆竹、のどを詳述し元旦の儀式賭博、拜神、廻禮、正月の飾り食事のことに至るまで細大洩らさず載せてある、又元旦が過ぎて九日までの間の行事、店開きと里

歸り、鼠の嫁入りのこと又十日以後の元宵の祭り天官賜福、婦人の迷信、龍燈に關する迷信、竹馬、繩飛び、燈籠流しなどの話から元宵趣話として明月笛聲、貧家一燈等の挿話も交へてある。その他外篇として蒙古の年の暮れや正月のことが書かれ煤掃き、元旦星祭り墨の塗り合ひのやうな風俗それから最後に青海蒙古方面の元旦の天幕生活のことをも記されてゐる。

大要かくの如き内容でその一斑が想像されると思ふ。吾人は此の種の研究に多大の敬意を拂ふのである。まだこの方面の實地の調査に随分かくれた學者が世間に現はれずに居るだらうと思ふ。由來支那でもどこでも現在の文化的研究を事實のまゝに研究するのは學者の間で學問でないとか學問としての値の少ないものゝやうに考へられてゐた。何でも歴史附でなくてはいかぬ。考證學的でなくちや駄目であると云つたやうな歴史家而かも因はれた甚だ窮屈な舊式の一家言をタテにとつて偉く誤信して居るものが多い、そしてそれよりも一層大切な生きた方面の吾人に直接交渉のある研究をすることを卑俗視して之をけなす傾がある。つまり書物から抜いて來た事柄でなくはテンデ認めない。町や村に現實に見られるやうな事實は探るに足りないものとしてゐた。言葉の研究でも詩賦や韻書。韻鏡に印刷されてゐなくては取扱はぬ。立派な方言として今日各地方に

現に話されてゐるのを取入れるのを餘計のことのやうに考へてゐる。歴史でも文字でも言語でも何でも同じことである風俗に於いては殊に然りである、その民俗的のものになると殊に道教的の色彩を帯びたものが多い。一枚ものゝ大きなビラに低級な印刷で色々神々のことから禁厭迷信のことなどの書かれてゐるものもある。然し多くは何にも書かれないで唯口から耳に傳はつてゐるのである。支那四億のうち八九割は碌に文字も読めず頗る低級なものである。支那民衆の風俗は迷信と云はず年中行事と云はず又占トと云はずこれらの低級な民族によつて左右されて行きつゝあるものである。

田舎の部落を研究したり實地の風俗を視察して之を科學的に取扱つたり又その結果を考古學なり歴史なり人文地理なりに應用して行くことは學問の一大進歩を促すべきものにきまつてゐるのであるに係らず、今日の歴史家にはやゝもするとその方面を無視して居た傾があつた。大勢の上では舊式の歴史研究は骨董視されて今日の文化研究からは次第に遠ざけられて行く。それと反對に、これ迄一般の歴史家などから無視されてゐた此の風俗民俗の研究は大勢の上から益々重きをなすに至る向上の光曙を得てゐるものと深く信ずるのである。この意味に於いて永尾氏の此の研

究は東洋文化研究の先驅者をなすものであつて支那の風習を調べんとするものは先年大阪屋號書店より出た『支那の真相』大河平法學士著と共に東洋文化研究の新人の必ず座右におくべき名著であると推稱しておきたいのである。

十四 大谷光瑞師と上海を船出す

一 無憂園を中心に高等閑人部落を

支那の儒者學者を何とかして優待し、之に敬意を拂ふやうな方法をとて、兩三年前のことであつた大谷光瑞師が東京ステーションホテルに見えた時、一度ならず寄合つたことがあつた。辜鴻明だの葉德輝だの、日本に親しみのある相當な學者は、之を交換教授の意味にて迎へるのも面白い、又よい企であると信じてゐる、然しその企圖は未だ實現の機に至らない。

昨年の夏は自分の新宅の家具求め旁々都合では四川重慶入りを企てんとて、日清汽船の細川親吉君などとも打合せしてゐたのに、漢口まで進んで見たら、宜昌から細川君の私信に本年中は自

分自身でさへ重慶迄は難しいらしいと四川兵の發砲の情報があり、後藤支店長も奥の方の危険を物語つてゐる。瀬川笹川山口岡諸老臺の好意で硯會など盛に催して貰つたりなどして、思出多き（故障顔々）大貞丸で長江を上下した、歸途鎮江から揚州に渡り兩手に花の高洲翁の好遇を受け、隋の煬帝も高洲翁の爲めに此の運河を造つておいてくれたのだなど、高洲翁の身の上をうらやみつゝ、曲柳の枝を土産の好記念に鎮江に來り、下江歸滬したのは昨年八月卅一日天長節の日であつた。この日から二三日珍しい颶風で、吳淞の沖には南陽丸のデッキ上から數へて見ると停船十二艘の多きに及んでゐた、自分は九月六日の布哇丸に乗つて歸東する考であつたから、それ迄には大風も止むことと思ひ定め、戈登路大西喜一君や住友名村、村上大律師、運輸杉本三菱秋山、郵便中林、商船武田、篠崎秋田、週報西本、公論渡邊、章炳麟の諸豪の内を大車輪に、又多く日本人俱樂部やカルトンカフェなどで珍味を御馳走になり、又始終晚翠永野君の案内で城内大世界の樓上に赤毛布を演じたりなどした。

九月三日朝八時小沙渡路村上君より廻してくれた乗物で偶然星加坡路膠州路の無憂園を訪ねて見た、昨年の夏訪ねて見る積りでゐたら、主人公大谷光瑞師は家具を揃へる爲め西洋に出掛けて

ゐられた、本年はそれとなしに一度せめてもその天才教育所の輪廓だけでもと思ひ、本間分院の方から無憂園の門を入り刺を通じて敬意を表しに行つた、通されるがまゝに熊の皮の布きつめてある第一の應接間に居ること一二分圖らざりき大谷光瑞師例の背廣姿で現はれ鄭重なる挨拶、實は昨晚香港から歸つて來た計りでと庭の京都桂離宮の池に擬せられた大池を眺めつゝ色々上海生活の御話、又二階の書齋寢室大食堂第二應接間、小堀遠州の一松の壁の、ペランダ、それから臺所食器棚、ロシア湯ワカシ、屋根うらから地下室までのこと、すべて主人公ひとりにて設計された苦心の有様、空間利用の妙處悉く實地につき指點せられた、又無憂園境内約一萬坪の設計、このことから『日本高等閑人』部落をこの邊から市外にかけて形造つたらとの希望まで。愉快なる打とけばなしに時のうつるを知らなかつた。

九月六日布哇丸で出帆し大連滿鐵に立寄る積りでと、自分の歸東のことにつき附言したところか偶然、大谷師自分も六日の布哇丸で大連に行き北京小幡公使の處に廻るプログラムであつたので、大いに船中の話相手を得ることになつた。大谷師は何れ無憂園の設計圖のこまかい青寫眞は船中に持つて行つて、それから高等閑人部落の話もしたいとのことであつたので、自分も觀光園

を支那につれて来る考の一端を述べ船で會ふことを挨拶し辭して村上邸へと急いだのであつた。布哇丸はパイロットの話に六日は潮の都合で未明に出帆する、五日の夜九時税關波止場からラUNCHを出す、大谷さんもこれに乗られると武田支店長、玉突き場で御注意があり、それも五日の正午に聞いたので大いに急がしくなつた、晩の秋山君からの招待會も折角の馬(出土珍品)の話半分にして中席の止むなきに至つた、八時五十九分と云ふキチキチに碼頭につき、武田、米里、多田、永野諸君の見送を辱うして一萬噸の布哇丸に入つた、食堂は大谷師橋瑞超師駿河船長を中心に電光の下大分賑つてゐた。話も話だが自分は揚州高洲翁よりの曲柳を枯らしては一大事と、早速ポニーに柳に水を仕度させたりなどして、小蒸汽で見送り客の去るまで又々サルーンの話仲間に入つてゐた。

上海吳淞から大連までは海上五百六十哩である、六日朝出帆すると八日の正午頃つく筈である、上海は虎疫の流行地だから大連港外檢疫と、それから糞便の検査、培養に六時間をとられるとの事も話があつた、海上五百八十哩サルーンは大谷橋師と自分との三人で時々之にキャプテンや事務長やドクトルが加はる位であつた。話題は上海の高等閑人部落のことから始まつた。

二 上海から大連まで談論風發

大谷師は云ふ。世界で最も我々の有意義の生活を送らうとするには上海が一番よい、色々の方面から見て上海は最も文明的である、又最も便利で重寶で愉快なところである、東洋を研究する學者も事業家も中流以上の隠居閑人も皆この上海で暮らすに限ると思ふ、獨り市内と云はず市外でも結構、市外なら相當の戸數に達すれば共同タンクや瓦斯の設備をすればよろしい、その代り地所は非常に安い、若し第一回目に高等閑人が觀光に来てくれるならば、十人位上海の無憂園あたりに閑人部落を作る考で、こゝに根據の中心を置くことにせられると最も妙である、現に今でも近處に五六戸の日本人の住宅社宅がある、始め十人位できる、之を三十戸位まで殖やす必要がある、自働車醫者その他色々の共同的便利が得られる、若しそれ支那人側や工部局ミニシバル方面に知人でも出来る人なら一層妙である、日本で十萬二十萬と云ふ骨董に現金を投ずる高等閑人はなんで上海に来ることを考へないのであるか、陸海軍なら少將中將大將の現役を退いた閑人、政治家なら時々東洋の天地を實地に見て、閑日月を送らんとする人、實業家なら將來の日支關係に着目せる人、殊に又著述家學者には御誂へ向きの好適地である、徳富君などは最もよからう、

但し學者著述家には室を興へる、それ丈の室を最初に餘分に設計してをく必要もあるから最初の閑人は富有者でなくては舞が舞へぬ。

無憂園附近は多少濕けるが、これは池を掘ればそれに溜めることも出来る、掘つた土砂を盛り上げて之に建築するが上策である。地下室まで入れて三階半の構造十八インチの壁を作りて一坪あたり下から屋根まで約八百弗で立派に建立つ、家具は別である、日本で洒落たうちを建てようものなら目が飛び出る程かゝる。

後藤子爵などが支那觀光客の獎勵をして居られるなら、一つ上海へ是非御つれ遊ばして上海に高等閑人部落の達成に御盡しにならんことを。

人間の生活には文明的の部分を取り入れなくては競争にまける、出来る丈科學を應用しサイエンスを利用することが社會を利し、自分を利する。それにつきては機械を用ひることに慣れる必要がある、日本人は數字の嫌ひな人種で數理を卑しむ、従つて西洋の機械の便利のものがたくさん出來てゐても一寸も利用しようともせぬ、南洋の事業にも出来る丈け機械を用ひてゐるが、ひとり落花生から油をとる方面の仕事は、南洋土人が二割がた豆を仕事しながら食べてしまふので

引合はず、これ計りは仕方がないのでやめた、ジャガイモにしても何でも土中から之を一々手で掘つてゐては駄目である、すべて機械を用ひれば見るまに完全に掘れて行くのである、すべて機械は勞力少なくて利益多く殊に世の進歩と共に機械は改良され、價は安くなり之に反して勞銀は世運につれて高くなる、機械々と口癖のやうに云つてゐるが、日本人は昔ながらの非文明の手仕事にのみ執着してゐる、これは世界の太勢を知らぬ爲めであるがこんなことではいつ迄も國力の充實する目安はつかぬ、サイエンスの教育を十分にしなければならぬが國民性が數理を好まぬ點に在るからよほどむづかしい。

洋服ぐらゐる便利なものはない、英國で八分どほり育つた爲めか家庭でも朝から晩まで背廣で通してゐる、一年のうち半分以上旅行してゐるのもあるが、洋服に限る、全く世話がない、日本家などで靴を脱がせる位禮を失することはない、京都で自分の處など客に靴を脱がせるやうなことをさせない、泥のまゝで上つてもらつてあとでそれ位は掃除させる、世話ないことである、脱がせたり、穿かせたり、それ丈でも時間が損である、御互に不經濟なことは早く止めなくてはならぬ夫人子供衆があればとにかく、吾れ／＼獨身ものには殊に洋服一點張りがよい、敏捷に動か

れるので結構である。

一時は政治的にでも野心があるのかと二三流どこの記者連が随分色々試めしに引かけに來たものだが、近來この十餘年氣まゝ生活をしてゐるので、大分世界に知られて來た、東京日日や國民など殊にその何等野心のないのを知つてくれて馬鹿なさぐりを入れずあつさりとい挨拶して返るやうになつた、下らぬ記者になると上京の目的をありの儘語つてやつても安心してくさらぬ、その裏面には政治的の活動でもする爲めでないのか、などとうるさく引かける、原敬さんみたやうに政治の中心人物にされてはどうもならぬ、南洋の事業もあり支那にアドヴァイスすることもあり満鐵に相談することもあり、旅順に相談することもあり、歐米にも時に用があり、支那學者の種々の位くつたがなくて、氣樂、自由な活動が出来るか判らぬ、人間は振られてはたまらぬ、社會の爲めにならぬ、この度も四川がもめて發砲されたりごたつてゐるが、一つ大連の満鐵試験場の方の用が片付き次第北京に入り、小幡公使に忠言して見たいことも考へてゐる次第です、關東州が大連の檢便に馬鹿な時間をかけて、乗客を無視した官僚式の停船を命じたりしてゐながら

他方に陸からいくらでも危険な交通が行はれてゐることに氣のつかぬ、このやうな抜け作が大連港を掌つてゐるのであるから沙汰の限りだ、山縣長官が居ればウント話によりをかけて云つてやるのに、當の相手が辭職してゐるので困りましたよ、新聞にウントその抜け作の狀態を書いて忠言を與へてやるつもりです、先日東京市の辻々の巡査の馬鹿さ加減は世界一であるあれでよくも二百五十萬の安寧が保てるものだ市民は世界一のえらものだ、上海の警察振りでも見に來させたら、もつと市民をえらくさせるに違ひないと皮肉つたら、永田助役が苦笑してその印刷を見早速辻々の巡査を上海に寄越したらしい云つてやれば利目がありますよ。

大連で満鐵圖書館長神田城太郎君や松崎鶴雄君はよく存じてゐますが、布哇丸碇泊中に旅順に出かけられては如何、この前肅親王のところには鴨子を持つて行かれたとき、博物館のものを御覽遊ばさなかつたのならよい序でだから、橘瑞超君の案内を獲て、橘君の鍵で開けば不斷誰れも見られなかつた敦煌寫經斷片その他ミラー十體すべて中央亞細亞發掘のものが見られるでしょう、それでは時間を打合はされ明日は布哇丸出帆の日だから今日のうちに往復される方がゆつくりしてよろしい。云々

大連北京の用を濟ませたら又上海に歸り何れ十二月には東京に上ります支那最近の時局を政局の中心にゐる人々が見に来ないで、末輩の言のみ信じてゐるから碌なことはない、政友會では岡崎邦輔氏などは最もよく了解して、色々の大勢の話が出來ます、いづれ上京の機に、また記者から包圍されることであらうと思はれる呵々

(大正十一年九月初九日記の中より)

三 梵語より中央亞細亞の古代風俗談まで

尙少しく肩の凝る學術方面のことにつきましては日本語のうちに現はれた從來の梵語(サンクスリット語)の要素のあるとにつき談じ、滿鐵の上田恭輔氏がこの方面につき小冊子の著作をされた筈上田氏の思付き々々を叢書の如く續々刊行せらるゝは誠に美舉である、又香木や鐵刀木等やにつきての印度語のこと、日本數詞につきて倍數組織なること(ひ、ふ、み、む、よ、や、いつ、とう)また日本語がウラルアルタイ語系統から古くより來てゐるとの學說なれど、實は日本人は今少しく南方の溫暖な地方より團體をなして日本の島に渡來せしものに非ざるか、米(稻)を作ることを知り、米をたべてゐた民族であり、鎬や劍を作るとを知つてゐた、相當の文明を有してゐた、之を南洋の未開人より來たとするもいかがかと思ふ、兎角此の言語ばかりでなく、人種の問題は學術上面

白いが、事が皇室に關する正直なところは遠慮して申さぬ方が多い、むりもない、然し自分は浙江省の温州附近にゐる米作のことも知り、丁度あの邊の文明を傳へてゐるやうに思ふ、浙江省には日本と關係の多いことが色々あるがまだ系統的に材料を並べる迄の考が立たぬ、ウツカリ發表も出來ぬが最近自分の考はかやうな意見に落付くやうになつた。云々

まだ學術的の方面で更に深入りした方面のことになると中央亞細亞の探檢のことである、船中へ最近に上海の惠羅書店で求めた英國スタインの中央亞細亞敦煌千佛洞の壁畫佛畫五采並びに寫真版を食堂へ持ち出せば、大谷師は橘瑞超師と一々これは毘婆門天である、曰くこれは何々であると持ち合はせの智識で説明を下さる。橘師はスタインのこの畫が一千九百十五年のもの、印刷で英國の地學協會の雜誌に廣告してあるのを見てゐたのに、こゝにその畫物の實際を見たものだから愈々興が起り千佛洞の内部の探險談が始まり、必しも唐代のものに限らず、近頃のホウシャン和尚も尙加筆せしめたる俗態なのがある云々とて、目に見るやうに説明を下された。

布哇丸船中サロン内が中央亞細亞敦煌石室、千佛洞の壁畫談に賑うとは上海大連航路に珍らしきことであらう、京都大學の羽田亨君でも、之に加はり居たらんには、尙同君が旅順博物館考

古分館ミラーの室にて別に嚴封の幾千の寫經斷片數函を、この前見るとの出來なかつた者もこの度吾人と共に見るの機會を得たことであつたであらうと思はれた。

十五 文字上から見た古代風俗の研究

支那上代の文化各般の研究に、當時の文字が一種の記録 Document としての價を有してゐることとは、史學研究法中特に注意すべき點である。文字各個の構造は少數の例からは、俄に信ずるに足る丈の史實は出て來ないにしても、あらゆる上代の文字は一つとしてその背景的文化を有してゐないものはないのである。繪に適する建築や家具類に關する文字は、一見してその實物を聯想せしむるに都合のよい方のものである。が更に進んで宗教、軍事、刑罰、經濟、政治等の方面に關するものを探り、その文字を關鍵として上代文化の神髓を闡明せんとするならば、更に複雑多様なる而かもその反面には尙一層興味のある局面が啓かれるのである。吾人は今こゝにその一斑を示す爲めに法制に關する五六の例を探つて、その文字の由つて來たつた文化の状態を窺つて見

ようと思ふ。

法制の状態

法制とは云ふものゝ確然たる分類によつて呼んだものではない。かりに此の項目の下に、(イ) 猷の字、(ロ) 弼の字、(ハ) 爾の字、(ニ) 憲の字、(ホ) 敕の字、(ヘ) 勅の字、(ト) 御の字、(チ) 教の字の如きものを採つて、その要領を示して見る。

一 猷の字

猷の古音は爾雅釋言に據れば、若、由などの古音と同じく「𠄎」である、然し入聲の「𠄎」は更に變じて「𠄎」の音となつてゐる。爾雅釋官及び周禮春官參照。六朝時代に移と普通に用ひられ、又以周切「𠄎」(廣韻參照)となれるも、その以前にはかくの如き「𠄎」(若)の音或は「𠄎」(道、圖と同音)の古音で行はれてゐたことを見るのである。猷が「若」及び「道」と同音なりしことは牽ひて猷の字の古義を窺ふ上に参考となる。今之を古代の文獻上より探つて見るに、次ぎの如きものがある。即ち、

詩經、小雅、巧言に、

突突寢廟。君子作之。秩秩大猷。聖人莫之。他人有心。予忖度之。躍躍龜兔。遇犬獲之。毛傳に莫謀也、箋云、猷道也。

彼何人斯。居河之麋。無拳無勇。職爲亂階。既微且臚。爾勇伊何。爲猶將多。爾居徒幾何。箋云、猶談也。將大也。

詩經小雅、采芑に、

蠢爾蠻荆。大邦爲讎。方叔元老。克壯其猶。方叔率止。執訊獲醜。戎車嘽嘽。嘽嘽焯焯。如雷。顯允方叔。征伐獫狁。蠻荆來威。毛傳に猶道也。箋云猶謀也。

備考、猶は猷と同字、こはなほ獨が猷と同字なるが如く左右置換せられたる文字である。猷に道、謀の義あるは尙書經にもその例が少なくない。即ち、

書經盤庚に、

王若曰。格汝衆。予告汝訓。汝猷黜乃心。無傲從康。古我先王亦惟圖任。舊人共政。書經君陳に、

爾有嘉謀嘉猷。則入告爾后于內。爾乃順之于外。曰斯謀斯猷。惟我后之德。嗚呼臣人咸若。

時。惟良顯哉。(中略)

惟民生厚。因物有遷。違上所命。從厥攸好。爾克敬典。在德時乃罔不變。允升于大猷。惟予一人。膺受多福。其爾之休。終有辭於永世。

などとある。何れも猷は道也、圖也、謀也、である。道、圖は兩者古音同じくミである。謀は圖と音は同じからざるも義が同一である。故に謀は猷と義に於いて聯絡あり、圖、道は猷と音に於いて同一であつたことがわかる。義に於いては尙、儀也、議也、詐也、順也、川也などあれども政治に關係ある部分は、道也、謀也の義なるを以て、その點にて猷の字の攷察に入らんとするものである。猷の字の古義はかゝる政治上の意味に發してゐる。その戰國時代より秦漢の間にかけては之を動物の意に用ひ、心猶豫而狐疑と云ひ(離騷参照)また猶糊と云ひ(水經注)或は又猶は獫屬。一曰隴西謂犬子とある(說文解字)。又攀木に巧みにして健登、猿に類し脚はや、短云々ともある(爾雅及び顏子家訓)位であつて、猶に別義の共存せることは云ふを俟たない。このことは茲に問題とする必要はない。

さて猷の字の構造意匠に就いて說文解字は之を犬酋の合字となし、犬を意味の符牒、酋を音符

文 古 字 の 猷

猷 猷 猷 猷

宗周鐘

積古齋鐘鼎彝器款識

晉姜鼎

嘯堂集古錄

楚子孫遣鐘

萃古編

毛公鼎

說文古籀補

猷 猷 猷 猷

宗周鐘

西清古鑑

晉姜鼎

攷古

石鼓文

(大篆)

師僂敦

薛氏鐘鼎款識

となしてゐる。けれども愚案にては猷は會意の文字であると考へる。酋は音符の役目をなせる外に意味の役目を兼ねてゐる。こは單一なる酋の偏ばかりでなく、更に奠の字を含めるものなどの存してゐるのである。勿論酋、奠共にその古音には *shu* の兩音を認め得る故、猷を以つて諧聲の文字たることを是認することは出来る。然しそれと同時に、又會意の文字として認められるのである。つまり猷は諧聲に會意を兼ねた文字であると云つて差支ない。然らば猷が酋又は奠と犬の字とで組立てられ、之に何故に道也、謀(圖)也の義が發してゐるのであるか、次頁にその間の消息を明にしてみたいのである。先づその古形を次頁に示して見よう。

これらの猷の字の古形を通じて存するものは一、動物、二、祭器、である。動物とは必しも、犬の字なりと限定することは出来ないけれども、犬の如き形した文字であることは認められる。これは犠牲のシンボルとして配合せられたものであらうが、その更に古い時代の形は、二一〇頁に示す如き動物繪文字で現はされてゐるのである。

龜版文上に見えたる犬の字

𤝵 𤝶 𤝷 𤝸 𤝹 𤝺 𤝻 𤝼 𤝽 𤝾

殷虛書契

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

卷四の四十五

四の五十二

四の五十二

四の十七

六の四十七

一の二十六

𤝿 𤝺 𤝻 𤝼 𤝽 𤝾

同 上

同 上

同 上

八の四

四の三十六

六の四十八

𤝿 𤝺 𤝻 𤝼 𤝽 𤝾

又はその他

𤝿 𤝺 𤝻 𤝼 𤝽 𤝾

此の類の文字は他の豕の字
などの動物文字に比し幾分相違のあるうちに共通點の存するものがある。之を犬の字なりと断定
するには、尙研究の餘地あるも古文の形は犬と見ても大差はあるまい。尙殷商貞文字攷参照の

みならず、犬は上代の社會にて最も尊重せられたる犠牲の一つであつて諸文獻に夙に明示せられ
てゐる。又禮記に用ひらるゝ調理にても犬は牛羊豕と並び貴重視せられてゐる。

左傳僖公四年にも見えてゐることであるが、

禮記禮運に、

君與夫人交獻。以嘉魂魄。是謂合莫。然後退而合亨。體其犬豕牛羊。實其饘鬻豆餹。祝
以孝告。溲以慈告。是謂大祥。此禮之大成也。

禮記曲禮下に、

凡祭宗廟之禮。牛曰一元大武。豕曰剛鬣。豚曰膾肥。羊曰柔毛。雞曰翰音。犬曰羹獻。雉
曰疎趾。兔曰明視。云云

これにて上古の犬の位置がわかる。この故に宗廟に供ふる羹に犬肥を用ひ、之を「獻」と云ふ。「獻」
に犬の字の含まれたるは此の爲めなりとは説文解字の説くところなるも、こは即ち上代の習ひで
ある。犬が上代に於いてその祭祀用の犠牲として價値の大なりしことはこれらの事實によつても
わかるのである。

次に猷の偏、酋が祭器の象なることは已下述ぶる所にて察せらるべきである。酋は古禮に大酋掌酒官と云ふがあり、酋は祭酒で説文には釋(祭の明日)酒也とある。『大酋』と云ひ、祭酒と云ひ、共に酒官の原義に起り、酒官の長を大酋と云ふ。これに據つて酋の本義は推測せられるであらうが、その字の構造は如何。思ふに酋は祭祀用の酒の容器、つまり禮器の象形である。何故之が禮器なりやと云ふに、猷の字の偏が古文時代に、時として奠となつてゐるからである。其の上半、酋は造字上酒の義にして、下半の六は祭几である。酋の字の繪文字は龜版文に明示せられてある。

酋の字を聯想せしむ可き龜版文及び鐘鼎古文



殷虛書契
卷七の十四
同
卷五の上



同
卷七の上
卷七の三十三
豊分敦
積古齋本



同
卷四の上
卷四の七
鳳拓
自本

これらを見れば酋が酒器の象たることは明であるに、説文に酋は水なかば器上に見ゆるの象と解いてある。謂はれなき解である。次に祭几は上古種々なるものあり。



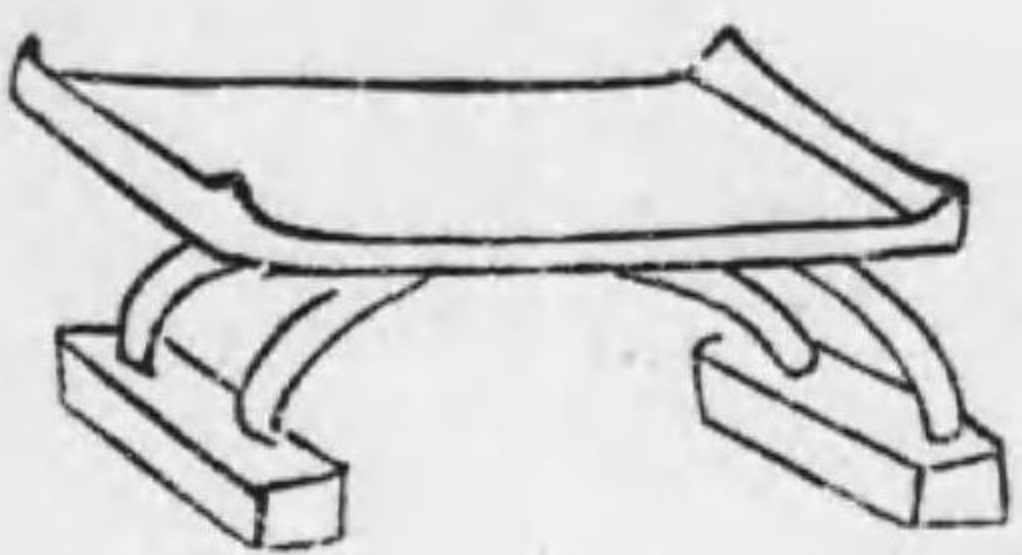
奠の字の古形

傳へ云ふ棋製の俎(梨樹材の俎か)と稱するものは、やゝその形が祭几に似てゐる。獨り奠の字のみならず、其の字、『典』の字などの下部の几(机)は、即ち何れも同形の祭几と考へられる。棋俎の略繪参照。象形文字はその形の立面圖を描いたものに相違ない。

要するに猷の字の解剖的の説明はかくの如くなるを以つて、その部分と雖も、祭祀に關係のない要素は一つとして

ないのである。而して犬は羹獻として宗廟を祭るの禮に用ひらるゝ犠牲であり、又禮記曲禮に見えたる如く、酒は清

酌と稱して、これ亦宗廟の祭りに用ひられる饌料である。その之を祭に供ふるに當つては之を酒



殷代の棋俎と稱せられたるもの
禮器圖に據る。

器に容れ、又之を祭几の上に置く。所謂奠祭するの狀態を示してゐるのである。これが猷の字の字面に現はれた意味である。然らば此れらの配合が何故に道也、謀(圖)也の義を胚胎するに至つたか。思ふに上代謀議を凝らすに當つては、必ずや宗廟を祭り以つて祖廟の靈に告ぐる所以の道を盡すを以つて常法となしてゐた。之を例ふれば禮記にも見えてゐる如く、上古は王事を行ふには必ず奠を設けて莊嚴に擧げられてゐたのである。

禮記大傳に、

牧之野、武王之大事也。既而退。柴於上帝。祈於社。設奠於室。遂率天下諸侯。執豆籩。遂奔走。追王大王亶父。王季歷。文王昌。不以卑臨尊也。

とあるのもその一斑を窺ふことが出来る。されば『猷』の字の構造は、單にその宗廟なり神なりを祭るときの方法を字形上に示し、即ち鼎肉(犬豕牛羊)と饌酒との配合を以つて、謀議そのことのシンボルとなしたものと考へられる。つまり酋、犬兩字のあるを見て上古廟議の開かれたところが神前、明堂にあつたことを聯想せしむるのである。亦これによつて猷の字が上古の政治關係文字であることも肯首せられるのである。

附説、猷に犬の字の用ひられたるは犬、豕、牛、羊等の犠牲中その一を假りたままであつて、その獻ぜられたものが犬に限られてゐたわけではないのである。然し犬(肉)は器皿の上に盛られた象形があつたり、(奇字孟銘參照)。又甘犬肉の會意で厭の字の音符猷が出来てゐたりする現象を見るのは、犬の肉が常食とされてゐた上代の古習を、文字上に遺してゐるものと考へられるのである。

二 彌の字

彌の字は古代音 *mit* であつて、説文にも見えてゐる如く時として彌が費と書かれ又孟子告子章などには拂の字にて現はれてゐることがある。その古義には擊也、戾也、などあれども茲に之を採りたる所以は、備(輔)也の義が古くより見えてゐるからである。爾雅釋詁參照。

尙書益稷に、

予創若時。娶于塗山。辛壬癸甲。啓呱呱而泣。予弗子。惟荒度土功。彌成五服。至千五千。

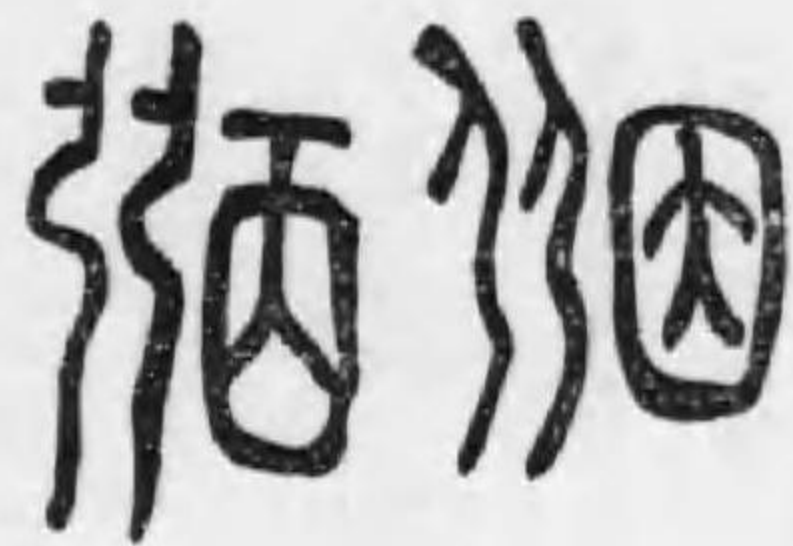
尙書說命に、

王庸作書。以誥曰。以台正千四方。台恐德弗類。茲故弗言。恭默思道。夢帝賚予良彌。其

代予言。

とあり、これらの弼は即ち孟子の入則無_二法家拂士_一。出則無_二敵國外患_一者。國恒亡。に於ける拂士の拂(弼)と同義である。この言語上の意味は、文字の構造を明にするによつて一層明晰の度を加へる。即ち弼の字の古形は次に示す如き結構を有してゐるのである。

弼の字の古形



毛公鼎
說文古籀補

說文解字所錄
小篆





說文解字所錄
古文第二

說文解字所錄
古文第一

說文は此の結構に對して从_レ弼西聲なりと説けるもかくの如きは音韻關係の上にて許すこととはできぬ。弗の古音は丙と音の上の聯絡はない。その理由に就きての音聲學上の説明はこゝに省く。

要するに弼は會意文字であつて弓と盾との配合、又は弓と支(撲撃の義)との會意から出来てゐるものと考へる。その要を左に述べんに、
第一、弓に就いて、

支那上代、弓の強弱に就き二様の象形あり。弱弓は
 し強弓は
 を得るこ
とする。これらは鐘鼎文及び龜版文から材料
とが出来る。



說文に弱は橈也と
ある。弓部参照。

弱弓に在りては羽毛又は總房にてもあるが、

一種の裝飾多が加へられて之を橈弓なりと云つてゐる。弱の字は結構並びに其本義は、これに胚胎するものである。後世力の少なきを弱の字にて現はし、禮記曲禮にも二十曰_レ弱となしてゐる如き用法を生ずるに至つた。又弱は若と普通の故を以つて、弱年の熟語さへ見るに至つた。その字原がかくの如く武器に元始的意義を發してゐることとは、注目すべきことである。強弓は裝飾なき弓の象にて現はされ、單に弓と書く時は、自ら強

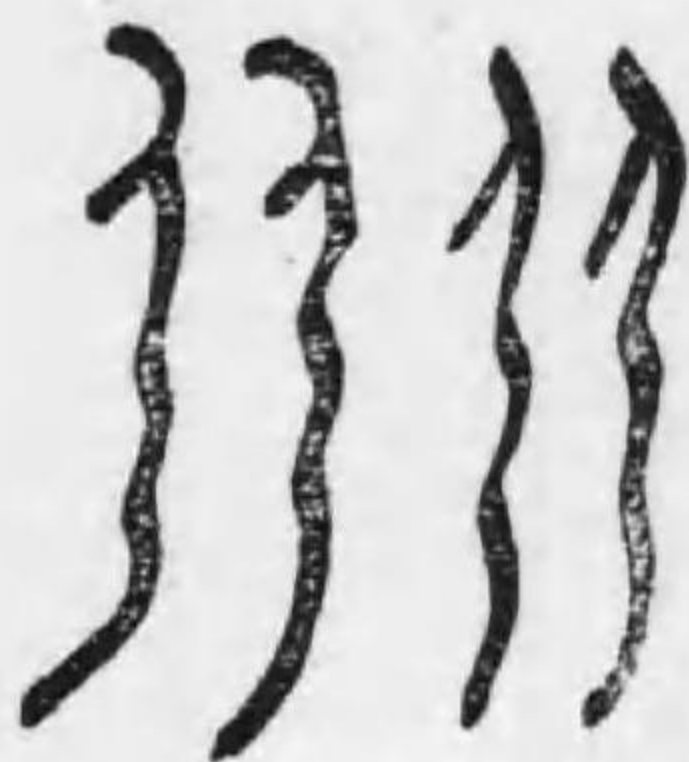
弓を指してゐることとなる。然るに弼の字は此の弓に从ふ文字なる故、その會意の結果は益々強さの觀念を著しくするのである。この故に説文にも二弓の弼の字は疆也。重也。と説いてゐる。この二弓合束の觀念は上代普く行はれ、或は文獻に或は文字上に少なからず現はれてゐるのである。例へば、

詩經、秦風、小戎に、

伐鴈孔羣。公矛鋌。鏞。蒙伐有苑。(雜羽の文ある盾、老伐)。

虎韞鏐膺。交韞二弓。竹閉緄滕。一毛傳に、二弓を韞中に交ふ也とあり。

鐘鼎文龜版文に



雙弓角
嘯堂集古錄

雙弓角
博古圖



亞
西清古鑑

殷虛書契
卷七の一

とある。重弓が疆也の義を示すは、武力を尊べる上代の思想としては最もふさはしきことである。

三盾に就いて

弼の中間に存する世は小篆時代は此の形で行はれてゐた故、説文には之を竹の上皮也と説き、清朱駿聲は之を弓の修繕用の竹木の義なりなどと云つてゐるが、何れも穩健でない。何故かと云へば弼の古文には此れが



となつてゐるからである。これは宿即ち宿の字中に含まれたる面と同一である。清、吳大澂によれば宿の字の古形は左の如くである。

宿の字の古文



豐姑尊
積古齋本

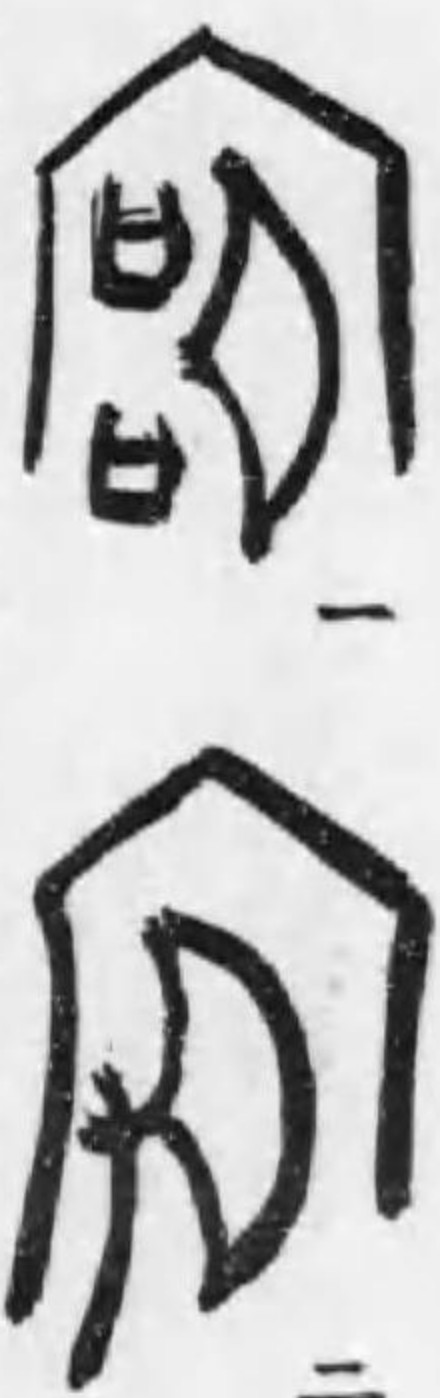


叔宿敦
說文古籀補





古陶器文
說文古籀補並
鏡雲藏陶

参 考



二 龜版文
九、股虚書契卷六の二十八、
及同卷四の十

今單簡に宿の字を説明すれば、宿は屋形と盾と人の會意である。屋形は一に穴の字ともなる盾は正面又は側面向きに描かれ、人は全身の形又は口或は手にて表示せられる。参考に示せる龜版文中の  は高田氏は耳なりとし、羅氏は鉞なりとすれど自分は採らない。股虚書契考釋六十八葉参照。宿の字はかやうな構造であるが、其構造上に盾が屋舎の象形に配せられてゐることは周禮の文面にて之を釋然たらしむることが出来る。即ち周禮の司戈盾に據れば及、舎設、藩盾、云々とあり。盾を屋舎、幄舎の側に樹て、以つて矢を禦ぎ身を扞ぐ所以を明示せるものなるか、これに據つて盾の象形が古代に其の正面を示したときは  の形に畫かれ目の字同様に畫かれてゐる。説文参照。



の如く



盾(𡗗)の字
説文



小篆より考
へられる盾
の古形

されば盾の字中の目はもと
説文に示されてゐるやうな
目(眼)ではなく、盾の形で

あつたのである。盾の正面圖は尙この外に詩經、秦風小戎に見えてゐる如く龍を畫ける盾、又雜羽の文飾ある盾、即ち蒙伐と云へる駮など、上古盾面に種々示威的修飾の加へられたものゝあつたことが考へられる。現時南洋バプアその他野蠻人の用ひる盾模様を見れば推察が出来る。右に示したものはその最も略式の模様たるに過ぎぬ。次に盾の側面を示したものは全體が新月形に象られてゐる。前記叔宿敦銘及び参考として示したる一、二の龜版文がその一例である。がこは更に多くの龜卜田獵文中に色々の配合は現はれて来る。即ち、

盾の字の龜版文



殷虚書契
卷七の三十一



殷虚書契
卷七の二十六



同
卷七の上
及三十一



殷虛書契
卷五の九

注意、戟は盾を手に取るの義なり。尙古代の盾の正面向き

の圖は山東省畫像石武人圖を見るべし。これらはず

べて盾の側面を現はしたものである。釋名に盾は遯也跪其後避以隱遯とある。然し文獻上では

到底詳細なる點を窺ふことは出来ない。今茲に

武梁祠
壁畫前石六



この前後に弓手
車馬騎士の畫像
あれども省く。
石索參照

傍證として漢代に畫かれた山東省武梁祠畫像石

の車騎攻戰之狀中より盾を擁せる武人の映寫を

示して見よう。此の形式の盾は畫像石中に少な

からず見出される。これによつて幾分か盾の側

面圓を推測することが出来る。のみならず上代

の盾の全體の形體が略髣髴として考へられるの

以上を以て盾の字の解釋とする。

いま、弓と盾との兩要素を説明し了りたれば之を綜合して觀察するに、弼はその二弓と盾との
會意文字である。即ち弼と云へる文字の成り立ちは弓、盾の如き武器を以つて、上代の人が自分
又は他を護衛してゐた事實を證明してゐるものと解せられる。一言にして之を蔽へば弼は武術の
義である。それが轉じて輔佐の意となり遂に政治上の轉弼の弼の義をとるに至つたのである。

三 璽 の 字

璽の字は古音 *dai dei* にして *ji* の音となる。然し璽の字の製作は比較的後世にして、周中葉
以後のことと思はれる。應劭の説によれば、璽は信也古者尊卑共之とあり、衛宏の説にては秦已
前民亦以金玉爲印。龍虎鈕。秦始皇子稱璽。又以玉。群臣莫敢用也。唐武后改曰寶。云々とあ
る。けれども

左傳襄公二十九年に、

季武子取卞。使公冶問。璽書追而與之。曰聞守卞者將叛。臣帥徒以討之。既得之矣。敢
告。と云へる璽書は、即ち璽を用ひて封じたる信書の謂である故、當時既に璽の存してゐたことは
考へられる。のみならず、その他の文獻上にも尙、韓非子、難に抱印。璽の語があり、また同じく

韓非子、外儲左下に、

西門豹爲鄴令。期年上計。君收其璽。

周禮、地官、掌節に、

門關用符節。貨賄用璽節。道路用旌節。皆有期以反節。

とあり。其の璽又は璽節は後世の印章なるべきも、既に璽の字の用ひられ居るを以つて、璽がその以前より製作せられ居たることは推測し得べきである。春秋運斗樞の如き俗書によれば璽は舜の天子たりし時に存し、文に「天皇符璽」とありたりなど傳ふれども信ずるに足らず。事物起源參照。要するに璽は春秋より戦國にかけて用ひ始められたるものの如く、その方法に就いては淮南の齊俗に若「璽之抑埴」とある如く、璽の面に一小塊の泥土を貼附し璽を以つて之を抑壓し以つて字形を存留してゐたものである。所謂封蠟式の方法を以つてしてゐたのである。次ぎに然らば此の字の構造は如何なる意匠によつてゐるか。先づ之が古形を蒐集するに二種のものがある。即ち異形同字ではあるが、一見左の如き著しい相違を呈してゐるのである。

璽の字の古文第一類



吳禪國山碑拓本



說文解字(小篆)



說文解字(古文及び小篆)



說文解字(小篆)



古籀文一種

璽の字の古文第二類



古籀文五種
說文古籀補

璽は第一類には玉の字又は土の字を含み、第二類にては金の字を含む。金とは周代に多く銅を指すが如く。この場合にも銅の意味と見て差支ない。所謂古銅印は水銀銅又は青銅印である。右兩類のうちにて金、玉、土の材料を示す義符を除き去るときは、あとは音符である。即ち第一

類に於いて爾、第二類に於いて尔は、その音を示す符牒で諧聲文字として結構せられたものとなる
説文にも璽は爾の聲によれるものとなしてゐる。

璽の玉の外に土に従へるものは印璽そのものを指したので、土製の焼物であることを指して表
はした文字である。略して埝となすのも同理にて説明が出来る。尙餘の字の旁なる尔は即ち爾の
下略の形、周末慣用の文字であつた爲め、直ちに採つて以つて餘、又は鉢となしたものと思はれ
る。この故に璽(餘)はその銅、玉、土なるを問はず高貴、神聖の誠意を聯想せしむ可き符牒をも
含んでゐるものと考へる。

四 憲 の 字

憲の古音は Kam Ken で詩經大雅、板、には欣欣とある可き所に憲憲と假借してゐる。憲の古
義の法也、表式の義であつて、詩經、書經等に多く現はれてゐる。例へば、

詩經小雅、六月に

我車既安。如輕如軒。四牡既佶。既佶且閑。薄伐玁狁。至于大原。文武吉甫。萬邦爲憲。
詩經大雅、崧高に、

中伯番番。既入于謝。徒御單單。周邦咸喜。我有良翰。不顯申伯。王之元舅。文武是憲。
書經說命に、

惟以亂民。惟天聰命。惟聖時憲。惟臣欽若。惟民從又。惟口起羞。惟甲冑起戎。
とあり、詩經六月の毛傳に、有文有武。憲法也。とあり、嵩高の鄭箋云。憲表也。言爲文武之表式
也。とあり、說命の孔氏傳に憲は法也とあり、憲の意は總て斯様に現はれてゐる。又
禮記の内則に

凡養老。五帝憲。三王有乞言。五帝憲。養氣體而不乞言。有善則記之爲惇史。三王亦憲。既
養老而后乞言。亦徵其禮。皆有惇史。

周禮天官、冢宰小宰に、

正歲帥治官之屬而觀治象之法。徇以木鐸。曰不用法者國有常刑。乃退以宮刑。憲禁于
王宮。

とあり、その五帝の憲は其德行を法とするを云ひ、又憲禁の憲は法を懸けて人に示すを云ふ。鄭
玄の注に憲は之を表懸するを謂ふ、今新に法令あるが若しとある。これによれば憲の字には、法

とか、表式とか、又、法を公示するとか云ふ義がある。これは言語上の義を説明したに過ぎぬ。次に然らば文字上にて憲は如何なる構造にて生れてゐるか。ここに更に進んで解剖的に、攻察せんければならぬ。上代多くの場合には憲は心の字をとらない。即ち、

一、憲の字の古文第一類



亞形憲夫尊
拓本



憲夫方彝
西清古鑑



憲夫方彝
西清古鑑



憲夫角
積古齋鐘鼎
彝器款識



召伯父辛鼎
說文籀古補

二、憲の字の古文第二類




井人殘鐘
筠清館金文



說文解字
(小篆)

字形の構造はかくの如く三角形のものと眼の象と、及び時として之に心臓の象として見られてゐるものとの結合である。説文の解釋によると憲は目と心と音符の害の省きであると云ふ。害が音符たる与否とに係らず、害の字形が憲と密接の關係のあることは争はれぬ。今心に就いては暫くおき、その他の部分に就いて考ふるに、目は見る人。語を換へて云へば庶民の意に見ることが出来る。多くの被治者側のものを示したシンボルであるが、そのよく注視せることを明に現はしてゐるのである。このことは他に罊(目相及也)衆、省、督、睇、睿などの目の意味を見てもわかる。次に然らばその民が以つて齊しく視てゐる所の對象物は如何なるものの象であるか。これ所謂法令なり、禁令なりが公示の目的を以つて表懸せられてゐる所の建造物であつて、揭示亭の如きものとも見られる。これが憲の上半である。

今憲の字の上半を他の多くの文字と比べて如何なるものの象なるかを推し考ふるに、その上半の  は舍。余、金、全、今の諸字に關係がある。即ち、

一、舍の字の古文四種

 一
 二
 三
 四

一は大蒐鼎(筠清館金文)二は召鼎(積古齋本)三、四は居後鐘(筠清館金文)
 二、余の字の古文四種




 一
 二
 三
 四

一、二は召伯虎敦(積古齋本)三は居鐘(筠清館金文)四は鄧子敦(積古齋)
 三、金の字の古文八種

 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八

一は共純赤金幣(說文古籀補)、二は仲子化盤(筠清館)、三は使夷敦(說文古籀補)、四は史頌敦(筠清館)、五は毛公鼎(說文古籀補)、六は吳鐘(積古齋)、七は寅簋(攷古)、八は井侯尊(古文審)

四、全の字の古文三種

 一
 二
 三

一は召鼎(積古齋本)、二は全彝(薛氏鐘鼎款識)、三は商鐘(薛氏同上)
 五、今の字の古文五種

 一
 二
 三
 四
 五

一は南宮中鼎(古文審)、二は邢敦(攷古)、三は卯敦(積古齋本)、四は孟鼎(古籀補)、五は毛公鼎(古籀補)

以上種々の例によりてその象形の共通點に就きて考ふるに、孰れに於いても屋蓋あり、梁あり支柱あるを見る。けれども其れが如何なる建物であるかは、具體的に指示することは出来ぬ。建築關係文字に於いて、



京の字

靜敦、古籀補



京の字

父辛敦、古籀補

の如きは明瞭にその實物を指示することが出来る。けれども舍、余、金等を通じてその象形が四阿造りの舍亭の如きものとは考へ得られないでもないが十分のことは判明せぬ。若し果して舍亭に類した簡單な建物の象形であつたとする時は、憲の字の冠りも亦かくの如きものとして推測し得るのである。即ち法禁を掲げて公示する爲めの揭示場が四阿造りに建てられてゐたものと見られる。周禮の天官小宰に憲禁于王宮とあるのも、全く國に常刑あり治官の統治上の沙汰を表式せんとするの意味が現はれてゐるものと察せられる。従つてその公示の亭の建設せらるべきところは王宮、法廷、明堂と云へる如き官衙の近くにあることもあれば里閭巷門の要路に於いてもあ

つたことと思はれる。所謂周代に三十里を一舍となせる如きも單に師行の意のみに非ずしてその地に舍亭あり官文の公示を見ることを豫期し得たものかも知れぬ。

憲の字の古文に  と

との配合あるは上述の如く之を法令の揭示亭と民衆とを會意せしむる所以であると見られる。之を最も簡單に見るときは『制札』の建てられた者と之を讀む所の人民との配合と考へても差支はない。文字上はかゝる要素を有してゐるに係らず、その會意の結果は別に第三の意味を生じて法也、表式也の義を示すに至つた。これ詩經時代に憲を用ひて萬邦爲憲とか又文武是憲とか法表式の義となしてゐる所以である。尙憲の構造は上記の古文の如く二要素である。その之に更に心が加はるに至つたのは比較の後であつて、他の多くの例から類推作用によつて出来たものと察せられる。元始時代に心のない文字が後に心をとるに至つたものは甚だ多い。傍證としてそのことを左に掲ぐるととゞする。即ち

一、惠の字の古文——上代には心をとらず。



一



二



三



四

- 一は龜版文(殷虛書契)、二は鄒惠鼎(積古齋)、三は甬攸从鼎(積古齋)、四は邾太宰簠(筠清館)
- 二、悔の字の古文——上代には心をとらず。



- 一は 芻鼎(積古齋)、二、三は龜版文(殷虛書契)、四は說文解字

この外惟の字の如き、懼の字の如き、心を探らずに現はれてゐる字は上代には甚だ多い。最初より心をとれるものも亦なきには非ざれど、憲はその惠、悔の類に屬せる方のものである。説文に憲か目と心とに従へる如く説けるは後世の形に就いてなした解釋に過ぎぬ。而かも根本は法文の揭示場と、之を見てゐる民衆との會意で法の義を胚胎してゐるものと解せられる。今日のものをつて之を考ふるならば支那の牌樓式のもので上代、法令の揭示場と推測せられる。周禮、秋官、司空、大司寇に、

正月之吉始和布刑于邦國。乃縣刑象之法于象魏。使萬民觀刑象。

とある象魏は即ちこの法の公示場の如きものを指したものでないかと思はれる。又同じく士師によれば、士師の職に在るものが國之五禁の法を掌り、官禁、官禁、國禁、野禁、軍禁皆木鐸を以つて之を朝に徇へと云ひ而して書而縣之于門閭。以五戒先後刑罰。母使罪麗于民。一曰誓。用之于旅派。(中略)五日憲。用諸都鄙。とあり。されば憲とは門閭に禁令法律の條文などを掲げる爲めの建造物とその萬民とを配した會意文字として考へられる。

以上の見解を更に強むるものは憲の字の古文(周代の河の名)である。その古形は次のやうに現はれてゐる。



散氏盤

積古齋鐘彝器款識

この場合には害の字そのものが憲の字に用ひられてゐる。而かも憲の上半及び害の字は前述各



舎、害、憲の字

種文字の比較によつて明なる如く一種の建造物の象形であつて、その側面圖 side elevations の描寫である。今これらの害及び憲の字の古文から推測し得る上代の建築物を考へて見るとここに示す如きものである。

此の圖は古文字と建築實物との關係を示したものである。これによつて想像するに害憲の字の現はす建造物は四阿四柱のものに非ずして單に二流れの屋蓋と二柱造りの牌樓の如きものであ



憲の字より遡り得る上代の禁令公示の象魏と之を讀める人民との會意なることを示す圖

つたことがわかる。またその法令の公示は平板に非ずして木簡、竹簡であつたであらうと云ふことは扁の字の古文からでも明である。憲の字はその公示の木簡を現はすことなく、建築物をその

側面によつて象り其の土臺まで築かれてゐたことも考へられる。目は之を圖に示したやうに見の字に見ることも出来れば又之を式の光景を躍如たらしむることが出来るやうに思はれる。



附言



割鼎

攀古慶本

憲の字の解剖的研究には更に別に割の字の古文として知られたものまでをも考へて見る必要がある。それは思ふに

建物と人物との會意らしくその配合上の意匠に就いてもこみ入つた意味があるらしく考へられるけれども未だ成案を得ないから此の古文迄には論及しないでおく。

五 敕 の 字

敕の古音は tok. hik. である。敕の意味は天子の書を下す命の義であつて漢の制度に始めて現はれてゐる。蓋し漢制によれば帝の書を下す四あり。一に曰く策書、二に曰く制書、三に曰く詔書、四に曰く、誠敕、これである。誠敕とは刺子太守を敕(誠)むるの謂である。後漢書、光武紀注参照。尙史記樂書に據れば、敕は餘每讀虞書至於君臣相上敕云々とあり、また漢、劉熙釋名

に據れば救は筋也。使_三自警筋不_三敢廢慢_一也とあり、更に古くは、戰國時代に於いても例へば、韓非子、主道篇に、

賢者救_三其材_一。君因而任_レ之。故君不_レ窮_三於能_一。有_レ功則君有_三其賢_一。有_レ過則臣任_三其罪_一。

とあり、敬筋の義にて用ひらる。されば救とは誠、筋の義を古義となし漢に至り勅命の一種に限られることとなつたのである。然らばその誠筋の義がその造字意匠の上にては如何なる要素の配合によりて成れるものなるか、左に之を就き少しく研空をして見よう。先づ救の字の古形を掲げてその部分的の觀察に入ることとする。

救の字の古文



銘勳鐘

攷古



陳猷金

說文古籀補

救の古文はかくの如く而してその右半は支として撲擊の意を示せること言を俟たず。左半は此の字の音符なる如きも事實は東と全然別の音を有する形なることあり即ちその東の如く現はれて

る。この東、東は抑も如何なるものゝ象形なる可きか。その類形の文字を蒐めて見ると種々ある。その、一、東の字の古文




六

一は東白、西清古鑑、二は大敦、西清古鑑、三は同上、四は西方彝、嘯堂集古錄、五は晋姜鼎、嘯堂、六は同上藤氏本、

その二、東の字の古文




五

一は大己白、二は父己鼎、積古齋本、三は吳彝、積古本、四は東彝、積古齋、五は大敦筠清館

その三、東の字の古文



一は穆公鼎、嘯堂集古錄、二は留鼎、積古齋、三は格伯簋、筠清館金文、
四は子東鼎、西清古鑑、五は龜版文、殷虛書契卷六の二十六

その四、黄の字の古文



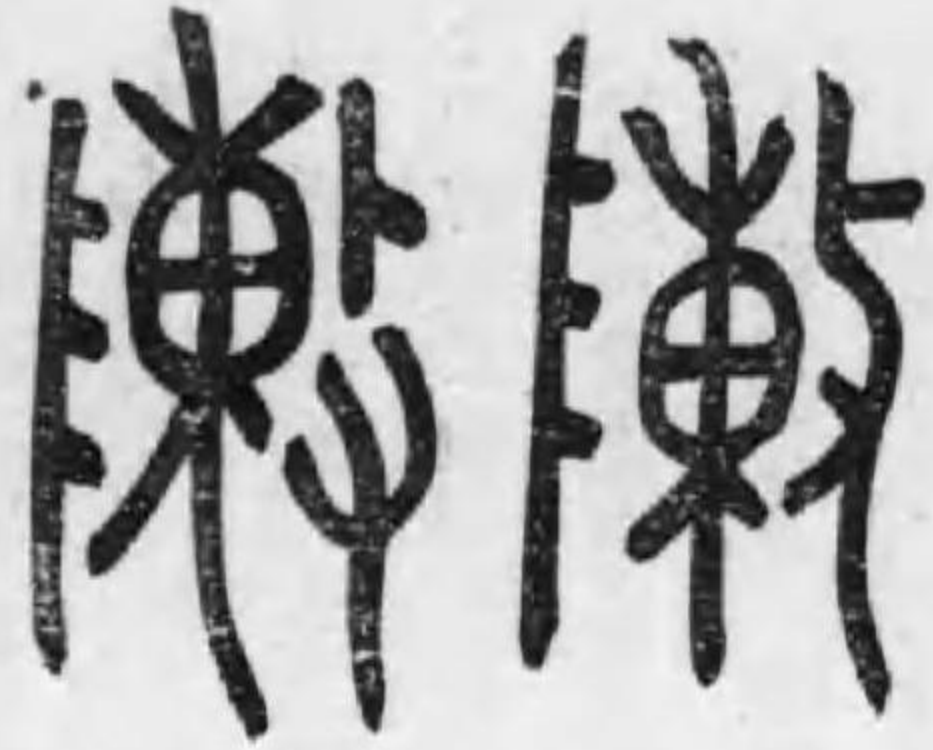
一は康鼎、積古齋鐘鼎彝器款識、二は師盂父鼎、說文古籀補、

東の類形かくの如く多い。されど的確にかゝる象形が何の意味を示せるかは断すべきでない。
三又を尖端に有して居る一種の長き竿柱の如く而かもその主要部に、



の存するを通例となすのである。殊にこのうち

でも東の字の中央部田は決して日月の日ではなく儀仗武器の旗印と密接の関係のある物の象形である。說文解字の从三日在木中と云へる解釋法の如きは全體の上より見て頗る怪しい。之を太陽に關係ある象形と見ることはできないのである。今その東の字に關係あり、且つ本題の救の字にも關係ある陳の字の古文に就いて見るにその古形は次の如く見はれてゐる。即ち、
陳の字の古文四種、



陳公子甌

說文古籀補

陳子子匱

說文古籀補



陳侯敦

積古齋鐘鼎彝器款識

陳侯鼎

說文古籀補

この陳の字は上代に於いてかくの如く支の字を含んでゐる。この支と東とは結合してさながら

敕の字の古文と近い形をなしてゐる。而かもその東の字は又敕の東と近い形をなしてゐる。又陳の字の偏の



は周代以前の文字に明なる如く阝階の段を示したものと

象形である。然るに陳は詩經、書經の時代に「列べる」「つらねる」の義で現はれてゐる。陳に列の義の存するは造字上、祖廟阝階の前に
その背後に他のものが多く並立せられるの意に非ざるか。
詩經小雅伐木に、



に樹立して

八伐木許許。醜酒、有奠。既有肥羜。以速諸父。寧適不來。微我弗顧。於粲酒掃。陳饋

八簋。既有肥牡。以速諸舅。寧適不來。微我有咎。箋云、陳其黍稷、謂爲食禮。とあり

また左傳、隱公五年に陳魚而視之とあり、注に張設也と見えてゐる。すべてこれらの陳に列、設の義がある。更に又、

書經、咸有一德には

伊尹既復政厥辟。將告歸。乃陳戒于德。曰嗚呼天難諶。命靡常。云々

とあり。陳の如きは述の義となつてゐる。何れも之を文字上の意匠に遡りてその何故に、列也、

設也、述也の義を胚胎せるやを温ぬるときは、結局、有形的に其文字要素の指示する所に到らざるを得ないのである。而かも陳の字に於ける古文の支は寧ろ從にして
を主となす。然るに敕の字に於いては
なくして支を主となす、而して陳の東は敕


の東と最も關係の近いものである。無論陳と敕とは其音の異なる如く、又その義も異なつてゐる。けれども其造字意匠の上には甚だ似寄りが近いのである。陳はその義が後に變じて陳列の義をとるに至り「善師者不陳」注戰陳之義（漢書刑法志参照）の如きを見る。而して陳の字の形も亦變じて陳となるに至つた。されば陳即ち陣が別也とは最も容易に理解せられる所である。

卑見によれば陳の字中の東は敕の字中の東と同類の象形なるを以つて東を以つて東を解し得べく、即ち



等は遠征の際

樹立する所の要具、或は時に宗廟阝階の前にその威嚴を張る爲めに樹つることもありしなるべく又時に統御政治上の權威を示す爲めのシンボルとしても用ひられしこともある可く、（周禮、稍人、注甸の字の條に陳を治むと讀みたるは之を證すべし）。要するにその象形は一種武力を示す所の上代の一慣用符牒と見られる。之に對して支の字を配し、以つての駘字即ち敕の形を取るに至つた。

然らば救に誠也の古義の存するは、一つの武力の背景を利用する爲めこゝに東(東)の如きものと、支(撲の義)との結合を見るに至つたものと解せられる。陳に列也の義のあるはその東(象形)の多數なるを聯想せしめまた形の東(タバ、約也)東(簡、選)も亦其復數の意味を有して居る。されば救の字は  を樹立して、その上代に武力あり權威ありしものがその歸服しないものに對し例へば戎狄時膺、荆徐時懲的の意味を現はしてゐるものと見られる。或は又儀仗用のものを現はせる物としても見られる。

救の字の部分的の構造に就いてはかくの如く解せられる。然るに説文には救は从支、東聲とあり、果して東を音符となす時はその古文に東に従へるものあるは音韻上矛盾を生ずる。不合理であるから之を會意と見る。假令東が音符なることあるにもせよ必ず又義符を兼ねた文字であると解すべきである。要するに救は武力のシンボルと統治のシンボルたる支(牧民の牧の支に同じ)との合字で遠征の義を生み出し、それが誠となり、その後天子が書を下す時の特別の名に限定せられるに至り、原義は失はれた。漢代以後は獨り詔救の救の字として知られるやうになり、宋以來は更に變形して力に従へる「勅」の形態をとり、爾來詔「救」は詔「勅」として書かゝるゝに至

つたのである。因みに救の東東の象形は其の實物より考ふるに漢代の壁畫に見る左圖の如きものが稍之に近いかと思ふ。これは當時の王者の齒簿の繪に王者の鳳輦の前後に樹てられたものである故之が竿頭は三叉を附けて考ふるならば所謂東・東の古文形に近いものが推測せられるのである。尙古代羅馬の時代に遠征の時に用ひた大蠶が又之を聯想せしめる資料となるのである。



六 勅の字

漢代の畫工に描かれたる大蠶の一例。漢武梁祠畫像石に據る

勅の字は普通に救の俗形なりと解釋されてゐるが本來造字要素の上で力と支(攴)とは上古常に轉換し合ふものである。この爲めに勅の字が救となり敏の字が勅となる如き現象がある。救が勅として現はれたるもこの現象の一つの場合であると見られてゐる。しかし更にこれには疑問を挟むことができる。それは此の救勅は相互轉換でなく別に又勅の字の古體として認めらるべき文字

が鐘鼎文にあつてその流を汲んでゐるが後世の勅の字の源なりと云ひ得るのである。

勅の字の古體と云ふものは敕の字の古體にも見出されてゐる通り東でなく東の字をとり、之に力を加へられたる文字である。而してその文字の用例は敕勅の勅の字の位置にある文字であるから或は勅の異體として認めらるべきものであるかも知れぬ。しかしそれにしても全然その古形を以つて勅の字の古體として認めて差支ないものと考へる。左にその適例を示して見よう。

勅の字の古文



師酉敦

積古齋鐘鼎彝器款識

これは東と力とで勅の字を形成してゐるものと見られる。東は諫めるとか東(選)ぶとか云ふ時に用ひられてゐる通り天子君長等の Royalty を示したものと考へる。君權のしるしを推し立て、威力を以つて戒しめ懲らすの意匠を示したものと解せられる。力の字には時として之に爪の字を

添へることがあるが、その力のその字ものは上代に或る器具を示したもので爪はそれを存するの意を示したものであるかも知れぬ。要するに勅の字の源は前條の敕の解を以つて説くことが出来ると思ふ。

七 御の字

御の字の古音は *u-ro, o-ro* である。その古義は禦也、又官名(冢宰)にて、侍也、主也、進也、等種々の意味に用ひられてゐる。

詩經邶風、谷風に、

我有旨蓄。亦以御冬。(毛傳に御禦也)宴爾新昏。以我禦寇。有洗有潰。既詒我肆。

とある御は禦の字の先驅をなせる文字である。また御の字を以つて王を貳くるの官となせる典據は、十くは、

詩經大雅、嵩高に

王命三申伯。式三是南邦。因三是謝人。以作三爾庸。(庸は城也)。王命三召伯。徹三申伯土田。王命三傳御。遷三其私人。毛傳に御は治事之官也。私人家臣也。箋云、傳御者貳王治事。謂冢宰也。

とあり。その他左傳桓公十七年には日御(天子有官日者侯有日御)とあつて曆数を典る者を指して御と呼んでゐることもある。また御を侍の義に用ひてゐる例は、詩經小雅六月に、

吉甫燕喜。既多受祉。來歸自鎬。我行永久。飲御諸友。包繁膾鯉。一毛傳に御は進也。鄭箋云、御は侍也。

とあるにて明である。かくの如く御が禦也、侍也の義にて用ひられる結果、統御の義を胚胎せしむるに至つた。賈誼の過秦論に振長策而御宇内とある御の字の如きその一例である。されば御の字に古代に、治事、治國の義のあつたことは争はれぬ。この意味は文字の構造と如何なる關係を持つてゐるか云ふに、造字上は馬事に關し馬の操縦に就いての意味を寓して居るのである。説文によれば御は彳と卸との會意文字であつて卸は舍車鮮馬也と釋き、御の字は使馬也とある。思ふに卸、御は共に御者の職を指す。而かもその用例は既に詩經時代に見はれてゐる。詩經小雅、車攻に、

蕭蕭馬鳴。悠悠旆旌。徒御不驚。大庖不盈。一毛傳に徒は輦也、御は御馬也。

とある。御の字がその馬に關した意味を有するはその造字要素として馬に關聯したものを有してゐる爲めではない。御は馭の字と異字同義、同音であるからその普通で使はれてゐるのである。今御の字の古形を見るに左の如きものがある。

御の字の古文



齊侯櫛 筠清館舍文



簠鼎

古籀補

頌鼎

積古齋鐘彝器款識

御の構成要素は人  午  及び征(行定)である。古文時代に於いて彳は或は征となり或は彳となる類例頗る多く、何れも進行の義を有してゐる。御の字の午と彳とを除きた

る残りの部分はイと止とであるがこは、合して疋を形成する。且つ行き且つ止るの義を示せる構
 造である。此イ止に對してトなる人の象の配せられたるは即ち行進を調節する所の者操縦者の義
 に見られる。而して御の字の中部の午は未詳なるも屋蓋の義にてもあるか。上代 Pro. So. Ko. Ho (午)
 の音は五角、抵抗の義を有する故午は單なる音符であるかも知れぬが、然し更に之に意味がある
 と考へても差支はない。若し今これに屋蓋の象と云ふことが認められるとすれば、その輦の屋覆
 ならんと推測せられる。詩經小雅車攻によるに、田獵用の車輦には四黄に駕し、旄を建て旄を設
 けて居たと云ふことが見えてゐるが、この類の輦にその屋蓋ありしは想像するに難くない。午の
 象形がかりに輦の屋形を示したものとすれば、之に配せられたる人の象は馬を御する人のシンボ
 ルたること、是亦容易に考へられる所である。
 傘は織の別字で近時發達の文字なり。午の字を  と書くは周代は勿論漢代まで續いてゐる。
 流沙墜簡に見
 えたる木簡

 (庚午)の午はそれである。次ぎに支那最古の車蓋の繪
 は、(東大)工學部の所藏山東省武梁石室壁畫に見えて
 るて、車臺の中央に柱軸あり屋蓋を支へてゐる。その大要は茲に示す如きものである。これによ



支那漢代
 車輦の一
 例

山東武梁
 祠石室壁
 畫に據る

幸、夏大馭馭などに多く馭の字を用ひてゐるが、詩經、書經には御を用ひて馭は用ひない。この

つて周代のそれが推定しうるものならば、又その
 造字當時の上古の文字製作時代に、かくの如き形
 の屋蓋のあつたことを想像しうるのである。御の
 字の中に屋蓋と人の象とがあること己上の如くで
 あるとすれば、此の兩要素が疋(イ、止)と配合せ
 られてゐるのは、つまり上代の田車を會意せるも
 のと解せられ、詩經の蕭蕭馬鳴。悠悠旆旌。徒御不
 驚。とある御が御者の謂なることは、實に此の壁
 畫に據つて推測せられるのである。

御の字に對して古來その古字として知られたる
 ものに馭の字がある。古音 ヨ、古義は説文に馭、
 卸解車馬也とある。周禮には夏宮馭夫、天官大

故に馭は御の字の古文なりとは文献上にては考へられない。されども鐘鼎文の上にはその古文が少なからず見えてゐる。而かもその形は馬偏に支の字、支の字、𠂔の字などを取つてゐるのである。

馭の字の古文



師襄敦(徒馭の馭)

筠清館金文



毀敦

嘯堂



大鼎

筠清館金文



毛伯彝

古文審



馭の古文に『又』『支』の存するは、四牡の操縦を意味した符牒を付けたものである、その上部などの存するは屋蓋の象と見られる。又その



の如く重ねられたる

象形のあるは、これ車蓋の古形に似てゐる。その具體的の案は未だ得ないが屋蓋の象に關係ある

ものならんと想像せられる已上の説明によつ

て、馭が馭馬と手(御者)と、時として之に

屋蓋の加はれる會意文字なることを知る。而

して御者の御の意味のときは、馭の字がその



奐の字の古文

窳父鼎、嘯堂集古錄

本字にあたり、馭はその本義のまゝで行はれてゐるが、御は治國の義、統御の御の義をとるに至つた。造字上にては御の字中の彳止は、馭の馬にあたり、前者の亼(人)は後者の又(御者の手)にあたるわけである故、馭は御と同様に解釋せらるべき文字である。

八教の字

教は音古 kak. kau である。古義は教訓、教化、教令、教育等種々の意があるが、釋名に教は效也とあり説文には教は上所施下所效也とあり。教の本義はその實効を期することを眼目としてゐる。書經舜典に、

帝曰。契。百姓不親。五品不遜。汝作司徒。敬敷五教。在寬。(傳に五教は五常之教)

とあるを始め、易觀卦に聖人以神道設教とある教の如き、皆その意味に解せられる。然し最もその意を明白に示せるは舜典に、

象以典刑。流宥五刑。鞭作官刑。朴作教刑。金作贖刑。

とある教刑の教である。その傳に不勤道業則撲之とある。書經の此の典は必しも舜時代の者でないにしても、而かも教がかゝる意に用ひらるゝは尙之を古義に叶ふものとして認めらるのである。左傳文公十八年に顛頊民有不才子、不可教訓と云ひ、國語晉語に可以教訓と云へるまた禮記學記篇に

雖有嘉肴、弗食、不知其旨。雖有至道、弗學、不知其善也。是故學然後知、不足。教然後知、困。知不足、然後能自反也。知困、然後能自強也。故教學相長也。

とある教學の如きすべてこれらの教は之を詮するに、上記の本義に廻り得可きものである。然らばその言語上の問題を離れて、その造字の意匠に就いて考ふれば如何。教の字の構造は教の意味を最も明白ならしむる意匠に本づき、十分なる効果を舉げしむる所以の方法を象形上に現はしてゐるのである。禮記學記に據れば、

古之教者。家有塾。党有庠。術有序。國有學。比年入學。中年考校。

とある。孟子盡心上篇には得天下英才而教之とあるが、その教育の効果を舉げしむる所以の方法に就いては、目前に見得る程度までに上代の教育のことを現はしてゐない。然るに文字上にはその造字構造が所謂書經の教刑の有様を描寫して、その之を勤めない者に鞭撻を加ふるの制裁あることを迄、象形上に示してゐるのを見るのである。上代の政治が政教一致であつたことは云ふを俟たないが、特に撻つの意味が「教」の字そのものに親はれると云ふことは、以つて如何に造字當時の教育の力法が適切峻嚴なる方策に出てゐたかを知るに足る問題である。茲に教の字の古形の一例を示して見よう。

教の字の古文

周 彝

筠清館金文

說文解字

(小篆)

散氏盤

積古齋本

これらの構造によれば、教は子と攴と爻との三要素より成り、子は訓育せらるゝの少年、その

頭部の比較的大きく描かれたるは兒童の象である。然し時には子の字を含まざる教の字もある。支は手に鞭を執るの象。撻の意を示してゐる。交は又々とも書かれ音符で *ka, kan* の音を示してゐる。

かやうに教は子を撻つので構成せられた文字である。而して教なる意味はその教育の効果に重きをおいてゐたのである。その爲め『教』は亦『效』の字にて同義が示されてゐる。即ち效の字も亦人と支撃との會意字である。その古字は左の如くに現はれてゐる。

效の字の古文



效文

拓本

智鼎

積古齋本



效尊

西清古鑑

寅簋

博古圖

效は古、致の義又授の義である。左傳文公八年の效_ニ節於府人_ニ而出とある效の字及び左傳昭公二十六年の宣王有志而後效_レ官の效はこれである。その他學の義勉の義などあれども、要するに文字の構造は教の字と同じ意匠である。即ち效は交と支とで會意せられ交は古文で人の象である。更に龜版文では一層その人の象形たることが明にわかる。效の交は人の正面向きなることは子の



交の字の龜版文

殷虛書契卷一の三

字の側面向きなるとは違つてゐても同じくその教訓を授けられてゐる人たることが想像せられる。

る。次に效の字の支は教の支と全然同一である。鞭撻の義に見られる。

以上教の字及び之と密接の關係ある效の字の上から、上代の教育の實際を推測するに頗るその面目を躍如たらしむることが出来る。

尙教の字の解剖的研究には學の字のそれが要る。これは禮記の學記にも、教學相長也。兌命曰。教_ヲ學_ハ半_カ。其此之謂乎とあるにても明なる如く、事實上教と學とば同じことになるのである。それ故、學と書いて教と訓することさへある。こは自動が他動に轉じたる言語現象の一つで珍しいことではないが、その觀念の密接なることはこれによつても考へられる。従つてそれが又字

面の上にも現はれて、學の古文は、一、塾(又は庠)中の兒童と、之を導く所の師の手と及び音符の爻とから成り立つてゐる。その古形は序でなから左に示しておく。

孟鼎

說文古籀補

大菟鼎

筠清館金文

學はかくの如く古文にてはその下半に字の字を含む。家(塾)に子弟あるを示す。之に對して左右兩手の配せられたるは薰陶の意に見られる。而してその間に存する爻は意味があるであらうが未詳で、その音はガク *ngak*, *luk*, *lak* の古音を示してゐる。されは學の字の結構は教の字と殆んど同一である。說文には更に數の字を示し、即ち支を加へて學の古形としてゐるが、これは教の字の類推形であつて、鐘鼎文には絶えて見ない字形である。要するに學の字は、勉學の意味の穩かな方面を示し、教の字の方は撻つと云ふ峻嚴なる方面を示してゐるものと解せられる。尙また此學の字の最古の形と思はれるものに左の如き元始形がある。その文字は殷代の龜版文字であつて、上述鐘鼎文の状態とは全く趣を異にしてゐる。即ち

殷虛書契

卷五の二十

殷虛書契

卷五の二十

之を學の字とよむことに定めて宜しいか否かは尙研究を要するが、その爻の部分が教の字の古形及び學の字中の爻を説く上に参考となる。とにかくかやうな元始文字があることを注意しておく。

また教の字と同義で子弟養育の意を有する文字に教の字がある。これは左傳に乳哺の義で用ひその造字意匠がいかにも學や教のそれに似てゐる。即ちその意匠は或る建造物中にある子を撻つ

ニ

の意で出来てゐるのを見る、その古文はこゝに示す通りである。一は號叔尊、積古齋本、二は、陳子子媯教女他、古籀補に見えたものである。これらによると教、教の支は子弟の

密接の關係ある義符であることは疑ひないのである。或は爻は兒童に易の六爻を教へ撻つてゐた

のでもあるか。それとも又こは上代の庠序の屋上の千木チキを示せるものなるか。

以上述ぶる所によれば古來學者の唱道せる如く文字は一つの繪であることが適切に理解せられる。古文の比較研究によつて、その繪の意味、會意の意匠等が一々判明して來る。而してこの文字意匠を説くには、上代の文獻を基礎にして説くが一つの方法であるが、それと同時に現代の支那社會の實際を背景として、所謂支那流に文字を観ることが必要である。從來支那の歴史の研究法が餘りに文獻を重く視過ぎて、有形物の考古資料を看過するの嫌があつた。文字の研究上には今日、文獻のみからは到達し得られぬ史實なり思想なり傳説なりが甚だ多く發見せられるのである。歴史が文字學の此の應用方面を裨益することの明白なる如く、文字研究そのことが又歴史に又考古學に種々の手掛かりを與へてゐることは云ふを俟たぬ。將來の東洋史研究に興味を持たるゝの諸彦は、文字學を補助學とし、説文以上に遡りて鐘鼎古文並に龜甲獸骨文などにまでも及んで十分その間ヒントを得るやうに勉められんことを希望する。

十六 極秘として口傳され

たる不老長生の秘法

支那では古來積善の家には必ず餘慶ありと云ふ語が行はれてゐるが、これは金看板と云ふ迄で實際社會を見るには更に穿つた觀察を下す必要がある。支那民族はその上智の階級に屬する人に在りては所謂仙を學んで隱遁を計り思を高遠に馳せて自ら清うし自ら慰むると云ふやうな道教の極めて濫い苦行修養を積むと云ふものもあるが然しその多數の民衆は太古の民である。愚民と云つては禮を失するが上智階級のやうな自力主義でなく他力主義によつて、符呪厭勝を事とする唯迷心本位に生きてゐる手合ひである。この種の階級の人々は積善の餘慶を二代三代の後の子孫に望むやうな餘裕はない。手段方法を選ばず目前の快樂を貪らんとするやうになる。正式の方法を勉めずして低級の幸福慾望を神佛に祈るのである。従つて淫祠を祀ることを忘れて迷信にのみ深

入りし淫祠を祀るのである。支那南北各地方の小祀を見ると到る所その廟楣には必ず「有求必應」の四字の題せられてゐるものがある。

支那では儒教だの佛教だの八釜しいことを云つてもつまりは四億萬の大多數は道教で教養されてゐる。その遠く秦漢の頃に仙薬を求め反魂を信じたり又兩晋の頃に老莊を祖述して清談逸遊を標榜したり葛玄、鄭思遠、葛洪が仙薬煉丹を稱道して時俗を風靡したのも全く之は民族の本質、時勢の要求に應じてゐたからである。しかし原來天然崇拜祖先崇拜或ば巫呪符水、無爲恬淡、又は不老長生の考、神仙術のことなどは之を老莊とか道教とか命名せずとも一般に深く浸み渡つてゐる情緒から考へて見るもよく想像されるのである。あの現代主義な又肉慾主義の嗜好から考へても誰しも支那民族の一般にこの思想感情の濃厚なものがないと云ふことは云へないのである。

二

古書の醫術を見て『醫心方』を讀まれたかたは如何にその方面の用意周到なる研究のある國民であることを知ることが出来る。又その料理飲料のことから言葉の方面（蝙蝠の蝠の音を喜ぶ如きその一例）を見ても判る。即ち料理の方では雜を去勢してその罌丸を集めて之にクヅを加へて

油で揚げた料理があつたり或は言葉の方から鹿（祿と音通ず）の鞭（陽物）を乾しかためたもの所謂鹿鞭を削つて宛も脛節のオカ、の如くなし之を酒友の爲めに老酒の上にふりかけて獻酬すると云ふやうなことをする。又鹿角と膠とを混じて煮詰めたものを採ることもある。何れも食物の方からと言葉の方からの迷信見たやうな精力の藥である。支那料理が一方の方の爲に好まるゝとか景氣のよいことの噂さるゝのもその爲めである。これは肯定もできるし又それ程でたかつたと云ふやうに否定をすることも出来る。つまりさうするとどうすれば一番よいのか、この事については春秋戰國の頃から既に明瞭になつてゐて、しかも文字の上では明にしてない。そは多く口傳であると言はれてゐる。北京方面に長くゐる人には多く實驗してゐらるゝ様子である。それは極めて迂遠な云ひかたをするとつまり吾人が例の無我の境涯に入つたときに或る抑制の方法を用ひて去（音テウ、氣をやること）をしないことらしい。丢了テウをしてはならぬのである。これは經驗と練習とによつてだれにでも可能性はあるとの事である。精力は發散しないに限るものとするならば自然の造物主は百二十五歳までを保證し得るものかも知れぬ。支那に居る人々は此邊の體験を有するものがあり又其等の人々は吾人の接する限り何れも不老長生の實例を示してゐる。又斯

の如き人々は手の爪なども長く延ばしてゐる。或る支那人にして二三寸も伸ばしてゐる寫眞を見たことがある。就寢の時は一々手に袋をかぶせて寝る。そしてその爪の折れるのを防ぐのである。長爪は別に長命の原因ではないが長命富貴のシンボルとして考へられてゐる事であるから序でながら附言しておく。

尙この祕法のことについては一々文字で書けないことが多いから困る。婉曲に書く筆をもたない。又國情がちがふので唯婉曲の筆では十分に了解する事がむづかしいことと思ふ。特別に熱心なるかたには矢張り口傳を支那の人々に頼むより外に沒有法子である。吾人は唯この橋渡しの勞を執ることを辭しないと云ふ事文を云つて銚を避けておきたいのである。

十七 自分の苦痛の經驗に因みて

支那の文字風俗の思出

一 文字上より觀たる苦痛

大正八年の秋は自分は男兒を失ひ又鹽原旅行で右手の骨を折り其の年は可なりひどい目にあつた。宇都宮縣立病院と大學病院とで骨の方は大體直して貰つた。然しおかけて左手文字の練習が出来た。鹽原は當時支那から歸朝してゐられた有賀長雄博士より招かれ回顧の瀑布にかゝる途中馬車轉覆して此の奇禍を得たのである。犬養木堂翁當時病院に見舞に見え、同情の言葉のあつたあとで、左手の人となつては山東愛硯家高風翰(南村)の左手組に這入つた譯である。硯の趣味もそこ迄行けば極致だがそれ程迄とは思つてゐなかつた云々、爾來和製高風翰と自分のことを呼んで笑はれることがある。

其の後四年目の今日手首が回らず左手を兼用してゐる。當時の苦痛のことを文字上や風俗上から少しく述べて見よう

さて、文字の上から調べて見ますと、快不快の觀念又は喜び憂ひ等の言葉を表はす文字、それから喜怒哀樂等の情緒を示す言葉には何れも心と云ふ字が使用されて居ります。それが或は立心扁と成り或は心と云ふ字其の儘の形で現はれて居ります。之を見ますと、前に述べた快不快、喜憂、喜怒哀樂など云ふ感情の源は、心であると思はれてゐたと云ふ事が解ります。又快不快、喜

怒哀樂の文字の共通のエレメントを採つて見ますと心と云ふ字があります。例へば愁、悲、怒、憂等は皆な心と云ふ字を持つて居ります。元來此の心と云ふ字のものと形はじ等で心臟の形に象つたものであります。そして此れを感情の湧き起る所の中心としたもので有ります。吾々が胸にこたへるとか胸を抉る等云ふ言葉を使用するのは文字の出來からも相似て居ります。慶と云ふ字は心の字の上に鹿の字を書きますが、支那では古代喜びの時には手土産に鹿の皮を持つて行く風習があつたから斯く書くと云ふ事です。次に苦痛の痛の字には疒を書きます。此の疒は尸が轉じたもの。尸ば尸が轉じたもので、兩者はもと寢臺の形であります。支那では日本の様に疊の上に直に床を敷く様な事はせず、西洋流に寢臺を使用します。で寢臺に横になる時は身體に痛みを感ずるとか病氣の時であるとか見るのであります。——夜分寝る時は別として——痛みとか病とか云ふ字には疒を付けるのであります。

斯くの如く文字の形の上から見て、其の苦痛關係の文字の古義の一斑を、知る事が出来るのであります。

二 愛兒の夭死と支那風俗の思出

私は平常は大變丈夫な方で病氣等はした事がありませんでした。又旅行中可成り冒險な事をしてきました。萬里の長城あたりを歩いたり、多くの臺灣の生蕃の中に自ら好んで入り暗夜一緒に話した事も有ります。又蕃界の深い山の中で鐵線橋を渡つた事も有ります。が一度も危険な目に逢つた事もなければ、病氣負傷等をした事もなく、至つて無病息災でやつて来て居りました。

八年九月私が臺灣の旅行から歸つて來ますと、六歳と三歳の二人の子供が同時に疫病に罹りました。これに對して日夜非常な苦痛を忍んで看護しましたけれども遂に三歳の男の兒の方は、丁度發病後二十八日目に永眠しました。尤も病氣に成つた時にすでに醫者は到底駄目だと云ひましたが、親として駄目だなど云ふ事は毛頭信じられません。私はきつと全快するものと思つて居りました。外の家の子供なら罹病と同時に其れが致命的のものとなるかも知れないが、自分の子供にはそんな事はないものとのみ信じて居りました。又葬式と云ふ事も他の家から出ることはあつても、そんなものは自分の家からは決して出ないものとも信じ切つてたゞ／＼看病にのみ努めてゐました。しかしそれは單に一家の考へ許りであつた。病勢は次第に進んで來ました。そして注射も數知れず酸素吸入もし夢中になつて看病しました。二日三日徹夜する事もありました。

愛しい自分の子の看病でありますから徹夜しても何ともありませんでした。が體は随分疲労も感じましたらうがそんな事には更に氣が付きませんでした。

或る時は醫者が後二三時間で息を引きとると申しますので、さてはもう二三時間の命であるかと思つて二三時間の経過を見て居ますと更に死んで行く様でもないので醫者はあてにならない、自分の熱心で癒してやれるものだと言味返つた事もあります。が遂に最後の時が來ました。醫者が尙食鹽注射を繰返したならば二三時間は保たせる事も出来るが如何しませうかと尋ねます。病人の様を見ますと小鼻がビク／＼動いて、唇の色が變つて來て居ます。で二三時間の命の爲めに注射で苦しめるのも可哀想だと思つて私も最早やあきらめて注射を止めて、靜かに私は脈をみて居りますと漸くに遠くなつて遂に脈が止まりました。其の日の朝まで、君が代を歌つたり、モシ／＼龜ヨを歌つたりして居ました。又喉が乾くのでせう切りに水を求めて居ましたが、言葉も明瞭に言つて居りました者が十餘時間の後にかう成らうとは全く信ぜられませんでした。息を取きとつてもまだ死んだとは想へませんでした。近親の者に通知しましたが其の時の心持はまだ子供が生きて居る様でありました。けれども、如何な苦痛でも忍び得られ、幾日の徹夜でも疲労を感じ

じないと云ふのもこれは皆な子供が全快するとの希望があつたからの事で、一度息を引きとつた後は子供が生きて居る様な心地であつても身體は非常な疲れを感じました。で此の時には未だ上の女の兒の方は四十度の熱でしたが弟の葬式の車を見てあの車に乗り度いなど申しますと親は耐へ難い思ひになやまされます。かうした苦痛を申し上げても、それは經驗のない方には到底御わかりになりますまい。

支那では親は、自分の子供を失つた場合には赤坊であると野に棄てる地方がある。又南部の方に行くと言ふと四十九日間子供の尸を家の中に置いて、時を定めて尸の前に往つて泣きます。其の時には麻の着物に着換へます。そして棺を出して仕舞つて後は高さ五尺位の金殿玉樓を作つて死んだ子供の人形を其の中に祭つて朝に夕に禮拜します。此のお宮の様なものには金銀五色で全部裝飾してあります。かゝる風習は如何にも親子の情の美くしい處を見せて居ります。處が支那では子供を賣買する事が盛んで、子供を籠に入れて之を天秤棒で前後に背負つて町の中を賣つて歩きます。そして一方が賣れると平均をとる爲めに他方に大きな石を入れるやうです。買ふ方では勿論雇人にするので、此の爲めに路次に遊んで居る子供を攫つて行く事もあります。上海臺灣な

どでは最近迄行はれて居りました。此の様な事を日本人から見ると、いかにも人情のない事で、一寸想像の出来ない事であります。物質上の要求の爲めにやるのでせうが、有り得べからざる行爲であります。まして私の子供を失つた者には及びもつかない事でもあります。死んだ子供と同じ年頃の子供を見るに付けても、亦子供の小さい着物や玩具を見るに付けても皆な涙の種であります。かう云ふ時に支那の子供を賣買する事を見ますといかにも厭な氣持ちがします。自分の子供を失つたときは夢であつてくれゝばいゝと思つた位であつた支那人は子供を深くかあいがることもあるがこの通り品物扱ひにすることもあるのであります。

十八 支那の社會相と文字

一 支那社會の狀態

支那の社會狀態殊にその風俗のことに就ては皆さんの中には既に支那に渡られ實地に支那社會の事情に通じて居らつしやる方もありませうし、又新聞雜誌書物等に依て支那の社會の狀態の一

般を御承知の方ありませうから、今更事新しく申上げる程のこともないかと思ひますが、文字の方面から見た支那の社會と云ふ意味で、自分の平素取扱つて居る方面のことを出發點として、少々愚見を述べて御教示を仰ぎたいと思ひます。

文字から見た支那の社會と申しますと、之は見る人に依つて十人十色でありませう。非常に支那を有難い國と云ふ風に見る方もありませうし、又現在の支那の狀態と文字との關係を考へて見るとイヤになつてしまふと云ふやうに見られる方もあるだらうと思ひますが、私の考では支那の社會は其全體が文字の中毒に罹つて居る。既に罹つてしまつたもの。今日の支那は其結果を社會の各方面のことに現して居るのだと云ふ風に見るべきであると思ふのであります。支那の社會が中毒に罹つて居るのは、獨り文字に於てのみならず、是迄に阿片の中毒に罹つて國運を危くしたことを自覺するに至つたことは、皆さんの御存知の通りであります。其外經學の中毒、つまり經書の學問の形式的方面にのみ走り、爲に支那の社會全體といふものが萎靡してしまつたと云ふ顯著な事實があるのであります。さればこゝに文字だけを特にやり玉に揚げて悪く申すことは出来ぬわけでありませんが、今日は此文字と社會との關係上文字中毒に罹つて居る顯著な點に付て御話

を致したいと思ひます。

言ふまでもなく支那人は形式に凝る其の凝り方といふものは日本人などの到底實行は固より想像だにも及ばない位、過度に、又驚くべき程に凝りかたまるのであります。其國民性から云つても支那人の嗜好に文字は最も調和をして居るものであります。支那人の考になつて考へて見ると支那の萬餘の複雑不便な文字といふものは嬉しくて堪らぬと云ふやうな關係になつて居るのだからと思はれます。日本人は此の點から云つてどうかと云ふと、一般に日本人は讀書人でない。従つて思想に耽るとか、文字に凝ると云ふことは一般の性質ではあるまいと考へる。それよりも寧ろ青竹を二つに割つた式の薩張りした恬淡なる性質を有し且簡單で清らかな氣持を持つと云ふのが日本人の一般の特色であると考へるのであります。支那人はさうでない。青竹式でなくて極く細かな微妙な點に迄情緒を馳せる傾がある。例へば文學上の事であつても又經學の方面のことであつても、總て情緒の方面に支那人は非常に發達して居るのであります。さう云ふ點から見まして、此文字の文章の綾を尊ぶと云ふことが支那の國民性に最も調和して居ると考へられるのであります。さう云ふ國民の全般の特性から考へると云ふと、支那の今日康熙字典の如き字引に載つ

て居ります所の五萬六千有餘のたくさん文字が、總て残らず支那人の根柢の深い情緒的の趣味性から生れ出てゐるものであると論斷することが出来るのであります。

二 支那文字の最初の狀態

支那文字の起源のことに就いては今日未だ充分なる科學的研究は出來て居ませぬ。けれども少なくとも今から三千年以上、是は四千年かも分らぬ、五千年かも分りませぬが、兎に角非常に古い時代からして既に支那民族の間に今日の支那文字の元始形式を備へた文字が發達して居た事が事實であるのであります。それには確實なる考古學的材料がたくさんあるのであります。其材料は實物として今支那の河南省で黄河の北にあたる地方であります。彰德府の近在安陽河畔の一小屯からして出る所の龜の甲、獸骨の類がそれであり、之れが既にもう數萬個出て居りますが、その龜甲獸骨は殷の時代に當時の人々が龜卜をする時分に用ひて居つたものであります。

其龜甲獸骨には一々當時の書體で以て龜卜の言葉が刻されて居る。其裏側には楕圓形又は圓形の溝が掘られてあつて、其側を火で灼いた迹がついてゐるのであります。そして反對の側即ち表面の方には恰も卜の字の如き形をした龜裂が生じてゐる。その龜卜文辭によると當時の人が例へ

ば何日に獵に出掛けやう、其時に雨が降らないか、どういふ物が獲られるか、又往來に災が有るか無いか、或は又結婚問題の如きことすべて色々な問題に就ての龜卜文字が皆此の龜甲獸骨の斷片の上に遺つて居る。又其當時の風俗の一般もそれで分るし、又文字其ものも元始的である爲め寫生風に構成されてあります爲め如何にも其意味が能く了解されるのであります。此の龜甲獸骨の斷片が殷時代のものであると云ふことに就ての證據は、其掘出された場所が殷の都の墟であると云ふこと、それから其文字の形が周時代の一般の文字の形よりもよほど原始的の形式を取つて居ると云ふこと、倒へば繪に全く近い形をしてゐること、埃及で申せばヒエログリフの古い時代の繪文字そつくりの形式に書かれて居るのであります。それが周時代に入りますると大分字數も殖えて來てゐますが字形の方も餘程實用向きになつてまゐりました。

古い殷の時代の字形は未だ繪畫の域を脱してゐないのであります。それに就いては色々述べた理由もありますが、兎に角其の文字が殷時代の物であると云ふことは確かなこととして今日の文字研究界ではきまつてゐるのであります。或はもつと嚴密に云へば殷よりも古い時代のもを當時の龜卜用文字に用ひてゐたのであつたかも知れぬ。何れにしても上に述べた所の河南省の彰

徳府から出る文字資料は支那文化の上では何よりも古い史的材料になつて居るのであります。其材料に現はれて居る所謂龜卜文字を見ますると云ふと動物に關するものが一番精密に書かれて居ります。例へば象のやうなもので、是は極く寫生風に肥滿して書かれて居りまして、長い鼻が餘程前の方にズツと伸びてゐます。そうしてその端の方が巻いてゐるやうに描寫されてあります。その他虎もあれば、豹もあります。一々虎や豹の斑紋が描寫されてゐる。それから馬もあります。馬などは鬣と云ひ、蹄と云ひ、尻尾の毛の澤山ある様子と云ひ、悉皆寫生風に書れてゐるのであります。それから鹿の字もたくさんありますが、此の鹿の字は其角の岐が幾つあつて、どれ丈の長さでどの方向に向いて居るかと云ふことまで一々明瞭に描かれて居る。而かもそれはどこ迄も文章であつて繪ではないのであります。つまりそれは前後の文章の續き合ひからして、立派な文字になつてゐることがわかるのであります。斯様に動物に關する文字が一番鮮かに了解されるのであります。

其次は家具類であります。是も亦大分形そつくりの描き出されて居ります。そのうちにも炊事用具が多いやうであります。其次には建築物に象つた文字であります。是は餘程原始的の形

に書き表はされて居ります。例へば門なら門の字にしましても、今書いて居る門の字とはよほど違ふ。今の門の字は柱と扉だけでありますが、殷時代の門の字は上に横木が通つて居りまして、カブキ門の形を爲して居ります。當時横木の無いものはあつたでありませうけれども、亦斯様なキチンとカブキモン式の體を爲したのもあつたと云ふことが分るのであります。

それから建築物に關係のある文字におきまして例へば「向」の字であります。此「向」の字は詩經などに使つてある所では、窓と云ふことになつて居りますが、此向の字の中（形古）の口は窓の象形でありまして周圍の輪廓は家の屋根と壁になつて居るのであります。それから又「高」の字に付て見ましても、是は矢張建築物の象形であつて恐らく是は住宅ではなく、城壁の間々に造られて居る物見臺の象形であらうかと思ひます。是は萬里の長城などに行つて見ますとよく解ります。其外又北京あたりの都の周圍の城壁に就て考へて見ても能く見出されるのでありますが、時としては屋根が二重になつてその重樓の屋根を示してゐることもありますけれども兎に角望樓式の建物の形を示したものであらうかと思ひます。高の字はその上半を詳細にしらべて見るとその部分は無論普通の城壁の女牆以上に高く築き上



窓

（形古）

向の口は窓の象形でありまして周圍の輪廓は家の屋根と壁になつて居るのであります。それから又「高」の字に付て見ましても、是は矢張建築物の象形であつて恐らく是は住宅ではなく、城壁の間々に造られて居る物見臺の象形であらうかと思ひます。是は萬里の長城などに行つて見ますとよく解ります。其外又北京あたりの都の周圍の城壁に就て考へて見ても能く見出されるのでありますが、時としては屋根が二重になつてその重樓の屋根を示してゐることもありますけれども兎に角望樓式の建物の形を示したものであらうかと思ひます。高の字はその上半を詳細にしらべて見るとその部分は無論普通の城壁の女牆以上に高く築き上

けてある建物を表してゐるのである。城壁と其上に建てられて居る建物と及び下にその入口の象



形がある。高門から見晴らしが出来ること云ふので、高いと云ふ意味が出てゐる。

されば高いと云ふことは建物の意味から來てゐるものと思ひます。又此女牆以上に建物の無いこともあります。其の場合は大抵此の高の字の下半の口が北方蒙古の方に向つて抜けてゐるのではない。支那の方つまり南方に向いた方に口があるのであります。丁度高の字の下半の口のところにあたる所、此處に小さい口がありまして——此萬里の長城に行つて見ると能く判るのでありますが、手前の方に誠に小さい入口があつて之に入ると向ふが行詰つて居つて、中に這入つて見るとやつとひとりの身體がはいれる位な狭い穴があつて、其穴が上に抜けてゐる。石段があつて、それから上へ昇ることが出来るやうになつて居る。つまり支那の方から云つて見ると其の望樓式の城壁はすべて外側には口が付いてゐないのであります。要するに高の字はかくの如く萬里の長城に見る城壁の一部と見ても宜からうと思ひますが、「高」の字の場合には矢張り上に望樓の如き建物が付いて居ると見た方が適當であらうと思ひます。次には「京」の字、是も矢張建物の形から發して居ります。此建築物の象形文字は上



代に餘程たくさんあるのであります。此處には其一例を示したに過ぎないのであります。

次には家の道具と及びその側に人の坐つて居る場合を示したものであります。是には人が一人居る場合と二人居る場合とがありますが、一人居る場合は此「即」と云ふ字になり、二人あるときは卿(饗)の字になるのであります。人は右にゐるも左にゐるも義は同じことであります。家具の「豆」と云へる象形この「豆」といふ字には別に植物の豆を意味したものでなくして高坏の臺の上に御馳走が盛つてあることを示したのであります。「即」の字はもとくゝ人が跪いて居るのを描いたので食物に即く、御馳走に即くと云ふ事を示したのであります。口を開けて居るもの口を向ふへそ向けて居るのもあり又後ろへ向けて居るものもあります。又時には「既」の字の如くに食べて済んだ(笑聲起る)と云ふ事を指示せるものもあります。斯んな風になつて飽食の義を示してゐるのであります。それから又「饗」の字後の文字で云ひますと御馳走の「饗」の字に當る文字、本來これが御馳走の意義であつたと云ふことを忘れられた爲めに、後に「食」を附加へたものであります。この字形は郷里の郷の字にも公卿の卿の字にも共通の字で、もとは同一字であります。周禮などにある郷飲酒の禮キヤウインシユレイとか郷射禮キヤウシヤレイと云ふ時の彼の郷の字の源になるのであります。郷と卿とは

後世は書き別けるやうなことになつてゐるけれども、起源は何れも一つことであります。斯様に食器を眞ん中に置いて兩方から人が差向ひになつて御馳走を執つて居る古代の風俗を赤裸々に寫してゐるものであります。斯様に上代の文字は餘程支那人の意匠を凝して拵へて居ることが判るのであります。支那人の間では上古倉頡と云ふ人が居つて、文字を作つておいて呉れたのだと云ふやうなことを申してゐますけれども、それは今日の學術界では信じられない。大古黃帝の時分に倉頡が天象や鳥獸の足迹を見て文字の制定に着手するに至つたのだと云ふのですけれども、文字はそんなに一人や二人の人の計畫して拵へた所で、そんな人工的のものが廣く民族の間に行はれるものではありませぬ、さう云ふことでなしに、支那の文字はもと上古支那の社會全體が自然と長い歴史を経る間に作り上げたものである。それに違ひないと見るべきであります。大体出來上つた詳しい時代は到底分りませぬけれども、上に御話し申上げた通り三千年、四千年、五千年位の古さに置いて宜しからうかと思はれます。如何に支那には之を文獻の上で徵すべきものがあつたにしても皆それ以後のものであります。文字の最初の時代はどの邊の時代に持つて來たら宜いか分らぬのです。

龜甲文字の中には天子に關する名があります。天子名とか干支とか云ふものは之に能く刻付けてある。それに依ると殷の時代の天子の名前で歴史に稱するものなども屢見えて居るのであります。そのために、先づ殷代のものであると云ふことに斷定されてゐるのであります。けれども實際申しますと、歴史の始まつてからの後の天子であると。その名前と實權とは中々えらいことになる。天子と云ふ名稱そのものが大きい意味になります。けれども、大古有史以前の天子といふものはそれ程のものでなく、地方々々の豪族のやうなものであつて、後の所謂天子とか君主とか云ふものではなかつたらうと思はれるのであります。けれども兎に角龜甲文字の上にはさういふ名前が澤山見えて居ります。「祖乙」と云ふ如きその一例であります。是は殷の天子の名前ですがその祖の字はもと「且」書いてありますが。「且」これは支那の昔の墳墓の形です。後に供物を臺に載せてその前に祭りをすゝからと云ふ譯で示の字を加へる。「祖」此形式は後世にありますけれども、古は「且」だけで之に乙を加へて天子の名前、祖乙としたのである。斯う云ふものがあるから、丁度之が史記などの所謂殷時代の天子の名に符合するわけであると思はれるのです。だから此の龜甲文字は殷時代のものだと見ても差支ないだらうと云ふ風に云つてゐる學者もある。けれども

本當のことは今少し古いかも分りませぬ、併し字形の上からすると非常に古い時代のものであると云ふことが分るのであります兎に角斯う云ふ文字が龜卜川の龜甲や獸骨に彫付けられてあるそして其材料は偶然にも二十年此方河南省の畎畝の中から非常に澤山發掘されて居るのであります。日本にも一萬近くの斷片が集つて居ります。ひとり日本ばかりでなく露西亞の大學にも參つて居れば、佛蘭西、亞米利加あたりの大學にも大分參つて居るさうであります。餘程物は擴がつて居ります。唯西洋ではまだそれを研究しないで唯籠に入れた儘でしまつてあると云ふことを聞きました。日本では及ばすながら私共は先輩の驥尾に付いて研究をやつて居ります。將來本當の研究が出來て來ると文字の研究に非常な基礎が出来る譯になるのであるし、同時に今迄説文や金文の研究で不十分なところが之に依つて色々確かまるものも澤山あらうし、又同時に壞れるものもあるであらうと思はれる。兎に角是からの文字の研究は新しい幕に入りますから大變樂しみがある譯であります。支那人はかやうな風に古い時代に既に文字を作つて龜甲の上に使用して居ります。複雑な文字も中々たくさん出來てゐる。龜甲獸骨の文字は吾々の方では龜版文と稱へてゐるのであります。此の龜版文の次の時代になると鐘鼎文となると。是は例の書の篆時代になります。

篆書の中にも大篆があり小篆がある。次いで秦の始皇の頃になりますと秦篆と云ふ、詰り小篆の
とを謂ふのですけれども、當時の實際の字體はそれよりも少し形が壞れて參ります。それから隸
書が始まり、草書が始まり、楷書が来て、行書が来ると云ふ、かやうな順序になるのですが兎も
角、大元から今日迄、文字の歴史を見て来ますと云ふと、支那民族が如何に能く意匠を凝してこ
れ程迄の文字にして呉れたと云ふことに就いては萬感交々至る次第であります。

三 支那文化と文字の繁簡

支那の一般文化の上から申しますと、例へば鑄金のことにしても、織物のことにしても、彫刻
のことにしても、或は文藝、廣い意味に於ける藝術方面のことにしてもすべての方面から見
まして、支那の文化方面に現はれてゐる意匠といふものは精巧を極めたもので、非常に緻密に出
來あがつてゐる。むしろ度を過して居りはせぬかと思はれる位に有ゆる方面に綿密の極度を發揮
してゐる。是は支那の文化のうち最も特筆大書すべき點であると思はれます。書籍の方面で云つ
て見ても彼の大きな古今圖書集成のやうなものを編纂してあること、か淵函類鑑とか皇清經解と
か云ふやうな、偉い浩漭なものを澤山編纂して居ります。かくの如きものは支那人の國民性から

作り出された^{アルバイト}作物と見るべきものでありますが、さういふ物を見ますと、明に支那文化の特色並
に支那人自身の特性がアリ／＼と見えて来る。それを背景に考へてゐる文字の方を見ますと、支
那文化が此の五萬六千と云ふ夥多しい文字を今日迄に作り上げて居るも偶然でないことが分るの
であります。

支那人はそれ丈までに文字のことに凝つてゐますが、折角これまで仕上げた文字を今一つ進歩
させるに付てはどれ丈の努力をして居るかと云ふことを翻つて考へて見まするに、支那人は一方
形式の事を非常にやかましくする。極端に行かれる丈け行く。その代りに、半面に於て急轉直下
餘程融通の利いたどうなつても少しも鈍着しないといふことをやる。つまり一方に何處までも形
式に凝り、やかましくするが、他面には打つて變つて反對の事を平氣でする。其處が支那人の支
那人たる所を發揮してゐるのであります。文字のことで云つて見るとあの通り非常に複雑な、形
式に凝つて文字を用ひ、それが爲めに國家が中毒に罹つたと云ふ程であるのである。ところが又
その半面に於て日本人も及はぬ様な漢字の略體を拵へてどし／＼之を使用して居る。尤も日本の
文字は性質が支那のそれとは違つてゐて、假名と云ふ音文字を作つて居るのであります。支那

にはそれが全く無い。其代りに普通の漢字を極端に簡單にして居るのである。其例を十ばかり此處へ擧げて見ませう。

劝(勸) 規(觀) 汉(漢) 叹(嘆) 鷄(鶏) 过(過) 还(還)
远(遠) 伝(儒) 时(時) 罗(羅) 苜(喜) 岁(歲) 罢(罷)

支那人は複雑面倒な漢字を矢張り複雑面倒のものと自覺して居る爲めか斯くの如く略字を盛んに作つて之を日常使つてゐるのであります。是は無論正式の場合、著述などの時には書きませぬが、手控の如きもの、又俗間で用ひます所の赤本黄表紙類、子供用の小冊子類を版にしますやうな場合には大抵此式の簡易文字ばかりを使ふのであります。實例は此の類の小本を見ても澤山あります。日本で云ふならば商賣往來とか庭訓往來とか云ふやうなもの、支那の俗間文字といふものは大抵此種の字体を覺へるのでそれで用が充たせるのである。現に最近に私が支那南部の田舎を遊歴しましたときに、連れて歩きました兵隊十餘名と途中で色々話をして文字のことを實地に聞いて見ますと、時々私に字を書いて見せる。それが一向に本當の字を書かない、何れ

も變な略体文字ばかりでありました。自分の方で本當の字を書いて示し聞き正して見るとそのやうな字は知らぬと云ふ。全く正式の字は讀めないのであります若しそのやうな簡單な字で用が達せるならば、支那の俗間は餘程進んだものである。支那の爲めに結構な次第であります。其處が又表面の形式をやかましく云ふ國民である爲めに、少しやかましく堂々たるものを書く場合には古來貴ばれてゐる形式一點張の字体を書く。これはつまりあと戻りをしてゐるのであります。

四 對聯紅紙を用ひる風俗

又支那の社會に於ては文字を紅紙に大書して門の左右に掲げることを致す風俗がありますが、是は門聯と云ひまして、必ず毎春毎戸門の左右に之を貼り出すのであります。之を俗に對聯と申して居ります。是は毎年正月に貼替へる、南方の方へ行くと大分減つて居りますけれども、北の方殊に山東方面の田舎では盛んに競争の姿でやつて居ります。字体も大層綺麗に書くので實に立派に見えるのであります。若し家に不幸のあつた場合には紅紙をやめて黄色か或は藍色かの紙に取換へます。けれども先づ普通は紅紙を用ひるのであります。單に門に掲げるのみならず一々房屋にも亦入口の左右の柱に掲げます。

書齋であるとか、應接室であるとか、普通の家族の室の入口すべてズツとやつてゐます。その文言は大抵聖賢の道に適ふやうなことを言つて居たり、又道教の思想からして財寶の出来ること子孫の繁榮すること、壽命長く生延びられることと云ふやうなことを美しい文字で掲げるのであります。併し普通は儒教方面の積善の家には餘慶ありと云ふ式ものを掲げて居るのであります。併しこの文言は唯ホシの表面上掲げてあるだけのこと、事實門の中では博奕も打つて居るし、我利我利の争ひもしてゐる。随分利己的の殺風景の事をやつて居るのでありますけれども、其處は支那流で行くのでありますから、唯道路から見るところに美しい言葉さへ掲げて置けばそれで満足するのである。その裏面に於て何を行つてゐてもそれを耻とも思はないのであります。實に其の邊は徹底したものであります。兎も角支那人が門聯の上で文字のことを大層几帳面に禮儀正しく表はして居ることは、支那の地に一步踏込んだものは直ぐそれに氣がつくのであります。支那の社會に於て文字が實際上どの位勢力を得てゐるかと思ふことがそれで分るのであります。支那社會は一方に於て斯様に文字を重くみ八釜ましくしてゐるかと思ふと、他方に於ては全く反對で前に申したやうに極端な略字を使つて居る。是は支那の社會に總て兩面の使ひ分けがある

と云ふことを證明してゐる所の一の材料となるのであります。其略字に今一つ磨きをかけて一歩進めるときは音字となり大變良くなるのであります。けれども其處までは支那人は苦心しない。一體支那人には斯う云ふことがあるのです。即ち或る目的を立てると、その目的に向つて非常に執念深く執拗く行く。時に依つては非常な打算から來ることもあるが時には随分大きな犠牲を拂ふことを厭はず又どれ丈の屈辱でも敢へて忍ぶのであります。——忍んでゐて其結果を得るに至ると、もうそれで満足してしまふ。それを今一つ努力して完全なものに仕上げて行かうと云ふことはしないのです。

事柄が文字問題からは少しく離れて参りますけれども、支那には後世に見る所の非常な大建築がございます。その大建築と云ふものを例へば御代が一變すると天子が民心を收攬する爲めに全部塗り直すとか非常な建築を起すとかします。——起さないにしても根本的に改造することをする兎に角目覺しいことを成し遂げて人目を新にする。併しそれが一度出來てしまふと夫れ限りである。後は日本のやうに營繕費を支出して何處迄も之が保存を計つて行かうといふことはしないのであります。一遍拵へてしまふと後は壞れ放題に任すのであります。だから北京方面（隆福寺の

如きもの)に行つて見ても、又山東省の舊い建物を行つて見ても判る通り破れ掛つた廟宇、寺院殿堂の如き大建築といふものは一度壊れ掛つたらそれが最後で、殊にその門番をして居る看門(門番)の如きものは、そこに外國人などが見物に来るといふと好機逸すべからずとて屋根にある黄色の大瓦を一枚宛剝して來たり、或は檐端近く並んで居る所の鷓尾鬼龍子(小さい獸類の形をしたもの)の如き物を取つて來て自分の室の机の下などへ匿して置いてある。そして時々參觀人も來ると件の瓦類を骨董品として賣りつけようとする。試みに看門に向ひ指で首を指しながらそんな事をしたら是だぞと暗示を與へて見るといふと早速に引込ませます。けれども看門連はさういふ方法を行つて小遣錢を得たがつて居ります。そんな風ですから支那では責任を有つべき番人自身が宮殿の一部分を剝ぎ取つて外人に賣りつける。

萬里の長城などに行つて見ても其邊の子供が大きな石の煉瓦を城壁中から壊して來て壇那樣買ひませぬか、一つ二弗ですが持つて行きますかなどと言つて頻りに買はせやうとする。世界の名物の長城も哀れなもので段々壊れて行く一方であります。當局者の方でも之を知らぬのでもないが警戒するといふことも絶對にないらしい。詰り其邊の土民は歴史の遣してくれて居る物を賣

つて金にしたらそれ丈利益だといふ風に考へてゐるのであつて、それが爲めに世間からどうといふ制裁があるのか。頗る怪しいものであります。事實何の制裁も行はれて居らないのだらうと思ひます。獨り無教育の土民ばかりではなく、山東省曲阜などに參つて見ましても衍聖公といふやうな孔子廟の本家本元であるといふやうな偉大なる名家にしても同じことであります。政府からして三十萬とか五十萬とかえらい營繕費を貰ひ受けて居りますけれども、それは個人的に著腹してしまつて妾を置いたり、博奕を打つたりする方にばかり使つて居るといふ事を土地で聞きまして。何も營繕一方面的のことに使つて居らないといふやうな状態なのであります。支那思想の淵源とも見るべき孔子の御膝許がこれでありますから大抵他は推して知るべしである。されば何處までも修繕をして昔日の面目を保存して置くといふやうな考は毛頭支那人の頭には無いものと考へても宜からうと思ひます。其代り若し此の次に誰か偉人が出て來て支那の天下を取るとさうでない、人心を收攬する必要から何處で金を融通してするか知らぬけれども非常な財源から金を引出して面目を一新するやうに大建築を始めます。かやうな根本的の事は思ひ切つてやるけれども一般的の修繕を宛てなしにするといふやうな事は支那人の考では出來ないのです。

五 支那最近の新字

以上の考へを以つて文字の場合を推測して見ますと時機さへ到来すれば根本的にやる丈の素質を有つてゐる。現に北京大學の文科大學の某教授で次の如き意見を出してゐるものがあります。支那が若し何時までも漢字を使つて居ると、支那の覺醒は永久に出来ない、本當に眼を醒めさすには斷然漢字を全廢して別の文字を使はせるようにしなければならぬといふことを主唱して新聞にその説を公にして居るものがあります。併しこは突飛の説であつて、一向世間では何等それに耳を傾けて居りませぬ。所が別に又今から五六年前民國二年と記憶しますが支那で音文字を發明した學會があります。それは政府の交通部教育部からも是認せられて居ると見えて、政府と民間との協力で以てその音文字に關する書物を出してあります、それには字母が二十四あります。此處に寫を持つて參りましたから御覽に入れます、日本の假名に稍々似たやうなものでありますけれども、少し拙いやうです、朝鮮の諺文に近いところもある。併しこれはまだ一般に行はれる程にはなつて居ないが今日北京の勸工場邊りに行つて見ますと此の音文字で書上げたお伽嘶の小本は色々出來て居りました。

六 支那讀書人と眼に一丁字なき苦力社會

支那人が文章を弄ぶ上に付て色々注意すべきことがあります。上述の如くに支那人はどうも其文字に餘り頭を突込み過ぎて、社會の大勢を忘れて了ふといふやうなことがある。此點は獨り隣國ばかりでなく近くは日本にも稍々其氣味が見出されるやうな氣が致します、支那は日本以上であるといふ丈である支那に行つて見ると、日本で考へるよりも特に切實にそれを感じる。詰り世界最近の空氣に觸れることなくして、支那だけで暢氣をきめ込んで居る。列國から何等交渉の無い時ならいざ知らず、今日はそんな時代でないことが判つて居さうなものであるのに、何處までも常に一般が文人的生活式のにこれ日も足らずにやつて居る。それが遂に支那の今日を來した譯ではないかと論斷されるのです、御承知の通り支那には讀書人といふ階級がありまして、苦力社會から超越して生活をしてゐる。併し人の財寶をあてにして何時もブラ／＼して居る連中である。この讀書人の中から昔であると秀才であるとか、進士であるとかいふものが出る。それから學者や政治家もこれから出る譯であります。支那人の思想で申しますと政治家政治屋といふのは詰り民の膏血を絞ることを職業としてゐる階級であるから、一般の國民には何等有難くない

階級であり又政府は一名怨府といふべきであると考へてゐるのであります。讀書人は文字を弄ぶ階級のものであつて、一般の國民は國民教育の普及してゐない爲め殆ど無智識でゐる。文字に就きての智識は先づないといつてもよい位である。其點は露西亞の教育状態と餘程能く似て居ります。日本の今日のやうに教育が普及して参りますと縦令車屋であらうとも、ペンキ屋であらうとも其の他下賤な仕事をして居る者であらうとも、毎朝の新聞位は今日では讀める。又自分の名前位は無論書けるやうになつて居ります。

支那の下層の人民は丸で筆を持つたことがない、又筆を執る必要もなかつたのである。自分が名が付いて居るのか判らないのか極端に言へばそれさへも知らなくても済むのであります。一字知つたからどれ丈の利益があるともきまらず何等字を知らなくとも差支ないといふやうな暢氣な社會でありますから、文字に就ての觀念は毛頭ない、所謂眼に一丁字のなくとも恥しくないのであります。因みに眼に一丁字のないといふことは能く世人の言ふことですが、其の連中が國民の大半を占めて居るのであります。一体「一丁字」といふのは、是は餘談であります。但本來間違でありまして、昔は「一个字」(一個字)と斯う書いてあつたのであります。一個の字、一つの文

字といふこと、介(箇)の字がどうかして「丁」の字に間違つて來たのであります。兎に角支那は全然文字を知らぬ連中が多い、それ故文字を知つて居る方の連中から申しますると、一體其の文字を知るといふことの動機は、自分が本來相當な青雲の志を得むが爲めである。學問の爲めに文字を知らうとするものは比較的少ない。孰れも皆、物にならうといふ腹心を持つて居る者であります。そこで若し讀書人にしてその志を得て政治家にでもなると、今度は收斂を事とするから民の怨の目的となるのです、さうなつて來ますと、今度は民の方はお構ひなく上の方の者だけが壟斷をしようといふ傾向になつて來る。中流階級智識階級、といふものが缺けて來る。苦力社會、勞動社會と上の方の極く上流の者だけで支那の社會を成立させることになるのであります。支那は大體に於いて、日本の社會のやうに中堅になる智識階級といふ階級が未だ出來無い爲めに支那に確つかりとした健全な輿論が起り得ない、上流の方では唯豪語したり、高飛車に苦い税金を取り立てることをするばかりである、下の者は唯何時も上を怨んで居るばかりであつて、上下雙方の事情が互に通じてゐませぬ。新聞だつても汎く國民の間に行はれて居るわけでありませぬから、今でも田舎に行つて見ると現在が清朝であるのか民國に變つてゐたのか、それさへ知らずに居る民

がまだくたくさんゐるといふ話を聞きました。これは事實まだそんなものかも知れませぬ。

先年安徽省の片田舎を私が歩きました時分に、土民に就いて聞いて見た話のうちに、土民の奇問が振つてゐる。「日本にも矢張お月様がありますか」と言ふことを眞面目に尋ねて居る男がありました。又「晝間は矢張東洋にも太陽が出るのですか」「矢張圓いか」と言つて頻りにそんなことを不思議さうに聞いて居りました。支那内地の土民の無智文盲の程度はこれ位であつてそれが田舎を組立てゝ居るのであります。一體田舎に這入つて見ると實際御話にならぬのであります、さういふ點から考へて見ますと支那人の文字を弄ぶ習慣は國民的特性であるなど言つても、是は極めて小部分に就いての話であつて、偶々其文字といふものが小部分の支那人の趣味に合して居るといふ風に考へられる。延びては一船支那民族の趣味であると言ひ得られますけれども、

支那の讀書人とは極く僅少な數で、其の間に使用してゐる文字を吾々が漢字と呼んで居るのである、と見るのが適當であります。前にも御話した支那讀書人の階級といふものは其數こそ少なければ文字に何處迄も没頭して居まして、社會の大勢をまるで忘れてしまつて居るのであります。このことは一は此大政治家が探つて來た政策でありませう即ち唯學者といふものは文字を弄ばせ

て置けば宜しいもので、政治には餘り喙を容れさせずに置く。本當の辣腕家は讀書人學者の上に居るのであります、總べてのことが支那では徹底的に進んで行くのですけれども、文字に眼の眩んだ連中ばかりは文字に没頭して了つて何處までも政界と殆んど絶縁になり没交渉になりそして唯文字三昧に入るといふやうになるのであります。それが爲めに、支那は文字があつて國が亡んだといふ批評を下しても、支那人はそれを否むことが出來ないのであります。と申します。どんな田舎に行きよしても既にも言つたやうに毎戸掲けたる門聯は實に立派であつてその文言も美しい。併しその戸内を見ると全く反對で不潔で亂雑で少しも門聯と調和しない。裏店同然で内部へ這入つて見ると言ふまでもなく汚くして豚小屋のやうな處に人間が居るのであります。

南方の富有な村へ參つて見ましても、家の輪廓だけは立派であるが、一度入つて見ると實に御話にならぬ程不潔のうちが多い。初め自分は北支那はどんなに屋内を清潔にしてゐても塵が天空から來るので、それが爲めに北方の人は不潔を厭はぬものだと思つてゐた。ところが南方へ行つて見ても、山間の潤澤多く極く麗な處へ行つて見ると、其處に居る土民は北方のと同じで矢張不潔でありました。斯の如きことは日本人には餘りありませぬことですが、是は南北通じて

さういふ風に不潔なのであります。併し不思議に文字だけは非常に美しい。讀書人と言へば文字を能く書きもするし、又文字を弄んで所謂辭令も巧みに使ひ分ける。これも文字を尊ぶといふ讀書人の間の風習から來て居るのであります。國は亡んでも文字の方が大切であるといふ觀念は今でも尙止まずに居るやうであります。最近の支那は留學生が大分海外に出るやうになつて、餘程文字過重の風習が緩んで参りました。現に門聯の如きものは一度留學して歸國した者は掲げない若い者で外國の空氣に觸れた者は門聯廢止を主張してゐると申して居ります。

七 文字過重の弊と支那兵の實情

國家の滅亡を犠牲にして迄も文字を尊ぶといふ思想は餘程古くから支那社會の全體を配して居た思想である、これが爲め文弱の氣風を盛んにした。支那はすべて文字萬能であります。北方諸民族が武力を以て侵入して來ても、文で以ていつしか征服して了ふ。これは歴史が既に度々證明して居るのであります。此の思想は國民全體にしみ亘つて居る。日本は武事を尊重して居りますが、支那では武事を以て文人以下に置いて見てゐるのである。されば支那では文官になるのが非常な青雲の志を得たことになり人も自分も賀するのでありますけれども、武官になるといふ

ことは餘り好く言はないのであります。どうも國情が違ふのである爲め、餘程日本の軍國主義、武士氣質の考とは異つて居ります。尤も先年私の支那旅行中護衛に附いて來た兵隊共の申して居つた所に依ると、斯の中隊長の王雨田さんは安徽省でも資産家の息子だ。軍隊は安武軍倪嗣冲に旨まく取入つて、訓練も何も出來ないのだけれども金力で以て中隊長の位置を買つたのだ。吾々は貧乏な爲め平兵で入つて居る丈のことだと言つて居りました。そこで不斷は此營所で用事があるのかと聞いて見ると訓練も何も無い。時々家に歸される。併し北京から檢閱官でも來ることがあると、其時は軍服を着て集まつて來るといふことを言つて居りました。尤もその軍服だつて兵隊が銘々自分で買ふのであるから、雨でも降れば直ぐ雨傘を翳して歩く。日が照りつけて暑くなると、服が悪くなると言つて緑色の傘を翳して行くのであります。日本の軍隊ではそんなだらしない事をする者は誰もありません。此の軍服は私共銘々で拵へたのだが悪くなると又新調しなくてはならぬのだと言つて居りました。暗路に行くには無論提灯を提けて歩く。

支那南北全體の兵隊がさういふ風であるかどうかは自分は知らないが、兎に角有名な倪嗣冲の配下の兵隊がこれでありませう。これでは武事が卑しまれて居るも偶然でないと云ふことを熟々感

じました。餘りに實際の状態がひどいので私は尠からず驚かされました。其の他金錢の問題に付ても支那では一般がさうでありますからひとり軍人のみを悪く言ふ譯にはいけません。自分の旅行中にも途中で色々五月蝸いことがあつて仕様がなかつた。思ふに支那の軍人は苦力と擇ぶ所がない。苦力生活をして居る者が一度或る親方について使はれる。例へば波止場の運搬事業に引張り出されるとする。そうすると其親方からがねを受け取る。さうするとその親方に就いてゐる偶々雇兵の募集でもあつて軍隊に行くことになる。そのときは兵隊になると言ふ丈のことで、苦力といひ軍人ともいひもと何等の別はない、要するに烏合の衆に過ぎないのである。といふやうに極めて無雜作に又露骨に批評する人があるが全く其通りであります。實際支那の武事の側はだらしがなく吾々旅行者の眼に映じた範圍では甚だ物足りないやうに見えて仕様がなかつたのです。それなら支那は文事の方で相當な見込が立つてゐるかといふと、此れ亦甚だ見込が立たないやうに思ふのであります。こば前に申したやうに所謂文弱に流れてしまつた結果でありますからして、是もどうも仕様がな。此の點は文字を支那社會が餘りに重んじ過ぎたといふことが、大なる原因を爲してゐるのでないかと思ふのであります。

八 日本の社會に於ける文字の實際問題

以上支那社會と文字との關係からして茲に考へ合せなければならぬ事は、日本現在の問題であります。日本の現代社會では餘程文字を軽く見てゐる傾向があります。こは日本の國家全體の上から見て餘程良い傾向であらうと思ふ。無論此の文字問題を輕々視することは一方からいふと宜いことではありませぬ。けれども、併し此文字に囚はれてまで國の進歩發達を犠牲にせんならぬとまでは日本人は考へてゐないのであります。詰り國が進む以上はそれに相應するやうに文字を改良して行かなければならぬ。日本人は一々口にこそ言はないけれども現在文字に囚はれずに行つて居る。それは皆様御氣付でもありません。支那人の文字に對する態度を見て居りますと、例へば机上で字を書く場合にどうするかといふに、先づ左の手を紙の上にピツタと置いて念の入つた筆の持方をして沈腕の姿勢で落ちつき拂つて叮嚀に楷書を一つ宛書く。一畫でも疎かにしないやうに書いて居ます。所が日本人はさうでない。忙しい態度で机に向つたりなどして書いてはゐない。卷紙を持つて立ちながらスラ／＼走り書きをして行くのであります。あの藝當には支那人は驚いて居る。逆も支那人の出來ませぬ術である。書きあけた結果は支那流の御世辭でもありま

せうけれども、立派な草書で読めない位だと言うて居ります。事實支那人はアンな風に崩してしまふと読めないのです。

支那人に遣る手紙は字は拙でも畫を正しく書いてやらぬと先方が閉口する。郵便の宛名など殊にさうであります。日本人の書き方は實用主義に出来て居る。それ丈に日本の社會は始めから文字をこなして掛つて居るのであると言ひ得る。今後はそれ丈で満足せずに小學校なり中學校なり詰りすべての教育方面に向つて更に、今一層大きく言へば新聞なり雜誌なり總べての社會教育のものにも之を及ぼして行きたい。今日ではまだ文字の形が舊式の儘で使はれて居るのが大分あります。是は書く方でなく、讀む方の文字に就いてふ云のであるが、舊式の形が今尙多く含まれて居りますから、之を早く打壞して讀む所の文字をすべて書く方の字形に近づけ、讀む方の字も書く方の字も同一に現はれるやうになるべきものと思ひます。そは讀む方の文字から云ふと之には随分要らない字が澤山あります。書く方の文字から云ふと假りに二千五百か三千あれば澤山であるのに、物を讀む爲めには五千も六千も知つて居らなければならぬと云ふことになつてゐる。少し支那の専門的の事を知るには八千か一萬位は知つて居らなければなりません。書くのと讀むの

と其處の差が餘りにひどい。實際に於いて支那の學問を専門に究める人でなければ三千以上は先づ要らないことと思ひます。所が舊式の方法でやかましく攻められると、讀む爲めの準備としては相當の數を覺へて居らなければならぬことになる。

最近のやうに新聞の段數も十段組が十一段組になり大正八年一月からは十二段組になりましたさう云ふ風になつて來ると活字は益々小さくなる一方で仕舞には六號活字にまで縮まつて行くだらうと思はれます。さうなつて來ると或一定の距離で新聞を讀むことになる、例へば五十歳以上の者は眼鏡無しでは「圓」と云ふ字、「園」と云ふ字、「園」と云ふ字などは殆ど同一字に見えて仕方がない。唯□構への四角の内にゴチャ／＼と畫の多いものが入つてゐると云ふ丈しか判らなくなり、園、團、圓、の何れであるか分らぬことになる。孫に讀ませて父祖が之を聞いて居ると云ふことに結局なりはせぬかと思ひます。さう云ふことでは實用文字も甚だ不更でありますから夫等は然るべく略字を使はなければならぬと思ひます。此の點は支那人は夙に實行して居ります。例へば「圓」の字でありますと「圓」是は日本と同じですが、それから支那に「圖」(圖)、「園」(園)此式の略字を使つて居ります、日本でも此の式のもので澤山だと思ひます、併し色々文字を品よ

く書かなければならぬと云ふやうな場合丈には、今吾々の頭に去徠してゐるやうなむづかしい字を書けばよいのである。然らざれば何んだか人に對して失禮のやうな氣がします。けれども、將來は簡単な字で間に合ふやうになる。それが又正式の文字だと云ふ所まで漕ぎ付けなければ徹底しないのだと思ふ。

支那は文字の中毒に罹つて今日の状態になつた。必しもそればかりでもありませんまいけれども、文字中毒が大なる原因を爲して居たと云ふことが言ひ得られるならば、日本は支那よりも書きかた並に假名の使用に於て支那以上に進んで居るが、更に今一層進歩させて、さう云ふ漢字の形式本位の妨になる事はすべて廢止して字數を少なくし又普通字の畫を簡易にすること其點を大に改良しなければならぬのであります。羅馬字問題その他色々國字に就ての根本的問題のこともありますが、取敢ず先づ現在の文字をもう少し研究して支那式以上の略字を制定し、それが權威を持つと云ふ時代にまで進めて行かなければならぬと思ひます。それに就ては及ばずながら先輩の驥尾に附して自分も努力致したいと思つて居ります。是は日本の社會全體が其氣にならなければ始まらぬ問題でありますから、其點に就ては國民全體の自覺と努力を待たなければならぬことゝ

思ひます。

十九 商業觀念の發達した

支那人の取引振

一 支那製品の販路擴張されん

昨春渡支の當時は山東問題の交渉中であつたのと日貨排斥運動の猛烈であつた際とて、天津城内外の如き該運動行列に満たされて居たのであつたが、未だ日用品其他悉く雜貨は日本製品がなぐしては一日も暮すことは出來ず、運動行列に加はつて居る者さへ眞に日貨を排斥せんとする者でなく單に儲はれ賃を得ての行動に過ぎなかつた、然るに今回の渡支に依つて第一に眼に映つたのは街道に飾られてある商品の大部分が支那内地製品であるのと獨逸品であることであつた。

實に支那は其内地に於て短時日の期間にタオル、靴下、洋傘、外品類似の陶器其他簡易な製作工業を著しく發展させて日本雜貨の輸入に對抗して居る、支那にては職工賃銀は普通一日四十錢

職長級の者にて六十錢程度であるに加へ原料は豊富で安價に供給されるから本那品に比較して生産費は非常に低廉である。加之制品は精巧ではないが丈夫で質に於て勝れて居る。

獨逸からは又現に凡ゆる物資が輸入されつゝあるが何れも支那の人情風俗を解し其趣味に適應したもので、其名稱、商標、形態等頗る支那向に出來安價で堅牢であるそして商品が支那人の趣向に適するのみならず其國氣性を察知し支那人を使用することに巧で、彼等をして深く心酔せしめて居る、故に獨逸商人と取引せる一支那商店の支配人をして「德國(獨逸)は今後三十年にして完全に再興するだらう」と斷言せしめる程では其信用さるゝ一例證である。

偕て之と反對に日本商品殊に關西製品の粗製輸出は依然として甚だしく、獨逸品等とは比較すべくもなく研究が足りなくして不評である、又東京製品は稍品質に於て好良であるが數量も揃はず高價であつて目下の處支那品獨逸品との競争は殆んど不可能の實狀にある従つて現在では「日貨用ゆる勿れ」の聲に影響せられて支那製品及び獨逸品に漸次壓倒され人氣は愈々失墜して居る有様である、且つ日本人は支那人を遇すること實に拙劣で商談が多少でも長びく傾向にあると直に扇或は算盤を以て相手の頭を撲つて遂に其商談を破裂せしめるやうなことさへある、商業上必

要な買辦使用の如き歐米人の手腕に遠く及ばない。

由來支那人は大陸的悠長で商才に長け短氣な日本人とは正反對の性向を有し、其日本人の缺點を知つて商略を用ひるから常に結論を急ぐ日本商人は時の問題で失敗して居る、勿論是は國民性の然らしむる處であるけれど、商賣上にては相手の國民性を知り習慣に従ひ悠長に永久的な商略を用ひねばならぬ筈である、そして云ひ古された言葉ではあるが、我國經濟上最も重要にして我製品の消費地である支那に對しては、國民自ら支那及び支那人に接觸すべく彼地の視察を行ひ、支那の人情、風俗、習慣又は趣味性を知るに努めねばならぬ。

而して商品は粗製濫造を廢して支那に適應させると同時に商取引も支那の習慣に従ひ徒に、小日本魂を發揮するを慎み、商品の販路を廣く奥地に進めて機會ある毎に三億四千萬の人口を有する地方の需要に今後の活路を求むべきである、現在の如く都會地より脚一步も踏み出し得ないやうな商策は今に於て改めねば我對支貿易の前途は寔に寒心に堪へない所で其振興の如き到底望み得られないと云へる。

二 對支貿易と日本魂のはきちがへ

商業観念の發達せる支那人は其半面に於ては著しく利己的巧利主義の思想に覆はれて居る。夫で内政は世間周知の如く混沌として歸結すべき點を見出し得ない、近次支那政府當路は世界的文化政策の相愛主義にかぶれ、ベルサイユ或は華府會議の經過に案じ、他國軍隊の出動が此處少くとも十年の間不可能であることを知つて、財政窮乏の故を以て借款に對する利子不拂の舉に出でんとするが如き態度がある、又山東問題の好果を延長して今や關東州の返還さへ迫らんとし、盛に宣傳に従事して居る、現に或バンフレットの一頁には『日本は關東州を得て阿片に依る莫大の租税を徵收しそれを以て廳舎の建築を行ひ某大官の如きは自己の懐中を肥して遂に裁判沙汰をまで惹起して居るのだ』と云ふが如きことを痛く指摘して居るこれは昨春汕頭から始まつてゐる。

香港其他をも己の手に奪還せんことに努力しつゝあるのは之亦注目すべきである、實際永続することのない歴代の支那政府は常に地方督軍の爲めに壓迫を受け、租税は全部彼等に奪はれ盡して國庫の收入は殆ど皆無であるから現在に於ては殊に甚だしく財政逼迫し最早數ヶ月間官吏又は教師の給料さへ支拂へない實態である、されば内密に使者を上海等に派遣して民間銀行其他に借款を申込んで居る程で、何等かの方法を以て此財政難を打開しやうと全力を盡すのも當然である

即ち其結果右の租借地返還の宣傳となつて居ることは云ふまでもない處である。

偕余の見る處に據ば國家としての支那は老大國に過ぎないが、其人物個々に就ては遠く我國人の及ばざるものがあると思ふ、日本人は自國が世界三大列強の一つであると一般に自尊心強く支那人を輕視する傾がある、之に對して支那人は矢張り日本人を尊重することなく、列強の會議ある毎に英米其他の提案に盲従するが如き必ずしも文化的強國ではないと云ひ、就中前述の如く軍隊を徒に出動せしめることが出来なくなつたのを知つてからは、春秋二千年來の外交的歴史に富む彼等の間には幾多の蘇秦張儀が出現し益々活躍して僅々五十年の外交經驗しか有さない我國に對抗し世界列強の間に諸種の宣傳をなして居る。我國人は單に商工業者のみならず一般に支那其ものに對し國民的に覺醒して彼を解し經濟上の地歩を徐々に向上させるべく努力せねばならぬであらう。

要するに支那の商工業の擡頭或は排日的外交宣傳振りは我國人の刮目して注意を要すべき處であつて、殊に獨逸商品の侵入、支那商品の自給自足の間に日本品の販路を擴大せんとするには現に我國人の手にて實施されつゝある紡績工場經營の如く支那内地に於て製造工場を經營するより

外に手段はない、蘇州杭州等の絹織物が支那中流以上向として有望なる如く、我商工業者の活動すべき天地は其行手に廣く横はつて居るのである、唯我國人の徒に支那人を輕侮するなどは洵に宜しくない、専心支那人の性行を察知し支那の國狀に精通し衣食住に伴ふ習慣に添ふべき商品を製作するに努むべきである、我國經濟上の前途を想へば吾等は深き自覺を以て對象を支那及び支那人に置き活路を其處に見出すことが緊切してゐると信ずる。

二十 日本に來て居る支那

留學生と勞働者

今日日本に支那人の勞働者が多數に入込んで居て時々日本の勞働者と衝突などが起るが、要するに資本家側が支那人の心理をよく諒解して居ないから失敗するのだ。支那の勞働者は金を得ると云ふことが唯一の慰安で、生活費を切詰めて着のみ着のまゝの轉ろ寢でも金を貯め得れば満足してゐる、だから直接金と交渉を持たないやうなことは何一つ行らない、教育の勿論あらう筈が

なくそれだけ理窟を云はず、仕事に従順で忠實だ、不衛生の點はあるが夫は支那の自然と土地が彼等に恵んだ習慣で、又病率なども少なく不思議に思はれる位で一般に健康を保持して居る、東京の中でも向島の工事地帯に千二百八十人の支那人勞働者が働いて居る。

六疊に七八人が芋を洗ふやうに合宿し、食事などは極めて簡單なものを採つて生活して居る彼等の懷には目的の金が重く溜つて居るのだ、面白いことに日本に來て居る支那人で留學生は廣東省、勞働者は浙江省の者と殆んど極つてゐる、で廣東省の留學生が日本へ金を持ち込むと反對に勞働者は日本の金を浙江省へドンドン送つて居るのだ、一體日本人が支那人に對するのは都會生活者の一部のみを相手にして居るがそれではいけない、中流以下のもの、夫れは支那四億中三億七千萬位を占めて居る田舎を相手として心理、趣味、趣向、購買力等を研究してかゝらぬと對支商工業は失敗するに極まつて居る。この點に於いて日本の實業家連に支那風俗、趣味の研究調査を慫慂したのである。

二十一 支那を顧ない日本の婦人

近頃歐米へ旅行する日本婦人が激増しましたが肝腎のお隣である支那をあまり顧みないのはまことに遺憾です。いまさらいふまでもないことですが。日支親善の實を擧げるには男子の力をかりるよりも婦人同士が接觸する機會を作り互に諒解することが最もはやみちで、進んでは離婚といふことも結構なことであり、家庭と家庭とが結びつくといふことはどんなに兩國民を融和させるか知れません。そこで日本婦人の通有性である引込み思案といふことは絶対にやめなくてはなりません、教育者などもこの邊を心得て生徒に對し倫理や地理の時間には大に支那の知識を吹込んで少くとも國家といふことよりもあの國とは個人的に親んで共存共榮の目的を達するやうにしたいものです、それで向ふの趣味や生活状態をよく知つておいて御馳走はなくともチーミ―チーイングなどでこちらの家庭を開放し温い心で隔てなく話すといふことはまことに望ましいことです、それで私が向ふへ十數回まるつて見聞したことを申上げるといふこともあながち無駄ではないかと思ひます、まづ衣服でみるとあちらはスカート式で柄よりも色をとり、室内よりも遠望にみばえのするものを重んじ衛生にもよいので洋装ばやりの現代にはこれに見遁されない點があります、食物は近來世界的に支那料理がもてはやされて來た程おいしくてしかも凝つたものが

あります。また七八人から十二三人も一つ卓を圍み一つ皿のものを分けて味ふ所に親しみがありません、住居では婦人の部屋は奥深く定めてあつて四疊六疊の居間があり腰掛と机がおかれて身の廻りのものがキチンとしてあります、夏などは家内中が中庭に出て腰掛を持ち出し目高や金魚鉢或は盆栽とか匂ひのよい蘭の花などをめでながら或は槐の木蔭で團扇をゆつたりと使ひながら夫婦兄弟子供が胡弓を手にして、たそがれ時を泣くが如く訴ふるが如く俗謡や芝居の歌を合奏するいかにもものんびりとした大陸的氣分で楽しんでゐます、中以下の家庭は表に出て横町とか水の流れに沿うて前のやうに樂器を鳴らして打ち興じてゐます、また小鳥とか虫の飼ひ方に大層趣味を持ちその道具も随分工夫したものがありますその虫籠や餌皿の形意匠など随分面白く出來たものがあります。日本には又支那の家庭内部のことが知られてゐないが婦人に就いては面白いことがあります。

御承知の通り第一夫人だけは嫁入りの時カゴに乗つて参り主婦としての權威が最も重いのです、がもし男兒がなくて第二夫人にあれば、子供が祖先の祀りを絶やさぬといふ意味から大に勢力を張ります、しかし誰は接客かれは會計と分擔がきまつてゐる故先づ嫉妬などは起きず圓滿で

す、支那婦人の特徴はチツトも、はにかまずに自分の意見をどしどし発表する。職業婦人などなか／＼雄辯家があり男子も及ばないときがあります。衛生思想も案外行き渡つてゐてかつて楊子江の南部を旅行中風呂屋に入つて三助に流して貰つた時一つの手拭を出した處下半身を拭ふものをも一つと申されてかへつて潔癖といはれる日本人の吾々が面喰つたことがあります。支那では空気が乾燥してゐるのでさう身體がべと／＼にならず、なる程毎日風呂へ行く必要もないと思ひました。飲料水もよいものがあり悪ければ明礬などでよく澄まして居りますから安全です。かういふ風に親しんでみると學ぶべき點も少くありません。同文同種の彼我の婦人が共に手を携へて世界の平和向上發展に資する處がありたいもので暑中休暇を利用して日本婦人が支那旅行を企てるといふことを、ぜひお勧めしたいと存じます。

おもしろい 支那の風俗終

本書の参考となる同著者の著述

一	支那料理の前に	東京	大阪屋號發行
二	長城の彼方へ	東京	大阪屋號 同
三	支那文化の解剖	東京	大阪屋號 同
四	支那趣味の話	東京	大阪屋號 同
五	支那の文物	東京	共同出版社同
六	現代支那語學	東京	博文館 同
七	文字の研究	東京	成美堂 同
八	文字の知識	東京	日本大學 同
九	文字の沿革	東京	成美堂 同
十	漢字音の系統	東京	六合館 同

不許複製



大正十二年八月十五日印刷發行

發兌

支那の風俗
定價金貳圓

著者 後藤朝太郎

發行者 濱井松之助

印刷者 宮田 六

東京日本橋數寄屋町

大阪屋號書店

電話
東京本局
一四三
三二七
七八三
五九七
番番番

著 氏 郎 太 朝 藤 後

支那文化の解剖

書定價參
留送料圓
十五拾錢

支那料理の前に

書定價壹
留送料圓
十八拾錢

支那趣味の話

書定價
留送料
金貳拾
五錢

行 發 號 屋 阪 大



fn

10
2
1



m



514
162

終